円盤と宇宙哲学の研究は

日本GAPニューズレター

1964 9月-10月

日本GAPニューズレター

- 1 9 6 4 - 9 月 · 10 月 号 目 次

通卷第24号

レインジャー七号,恐怖、その他 G・アダムスキー	1
あなたはなぜこの惑星に生まれたのか C・A・ハニー	9
ニューズダイジェスト	11
質 疑 応 答 G・アダムスキー	16
推せん図書	20
生命の科学 3 G・アダムスキー	21
編集後記	32

なわち月に

人間を降ろすための安全な着陸場所を探る目的

があっ

す

ャー七号はこれとは異なる目的を有していました。

レインジャー七号、恐怖、

その他

) ・アダムスキー

うした 宇宙開 べて のたびに公表されたわずかな情報を分析するにはそれを一種のハ メ絵として見る必要があります。 れも が一体公開さ が打ち上げられました。そして、 ているように、 発 大実験 のだろうかと人々はいぶか で何が達成されたのでしょう? 今年になって 月面を撮影した写真類のす 米国 から二個 っています。こ Ø 打上げ 月 U

たという情報を入手しています。 べたように、 ている学徒のすべてを仰天させるでし 数ヵ月前 われ されまし に月 れ は時代遅れとなっている古臭い教科書で今なお勉強し もしその写真(複数)が公開されたならば、少なく は た。しかれ 向けて発射された たカメラのすべてが故障を起こした 私は当時かなり優秀な写真が撮影 だが先回の "最近の レ よう。 1 ジ ヤ ー六号の結果 情報" され のだ ځ で述 し

> ング は決 **漕**陸 出てきました。そ 技術者が月に関し することを示す写 りません 月について 木がないというの かの密林へ訓練に 月 面 ょう。 ル地帯 ょう? して公開され であ した場合にそ かしこの二個 の広 レ 清陸用 よく知 い地 結局 ン 真がなければ、その事実を彼らが知るわけがあ っていることを意味します。月面に密林が存在 これは彼らが一般に公表されている知識以上に 派遣される予定だということでした。 なえて、この宇宙飛行士たちはこの世界のどこ のときの説明によると、月のジャング の服を着た一団の宇宙飛行士がテレビの画面 ジャー七号が打ち上げられる数週間前に、ジャ て持っている知識にたいして重要なキィとなる のロケットのあいだに起こった事柄は科学者や ないでしょう。 域を撮ったものもあったのでしょうが、一般に れは達成されました。四千枚に及ぶ写真の中に なぜ彼らはこんな訓練を行なおうとい その理由も前述のとおりです。 月に ル地帯に ろの

思われます。
について述べましたが、右の件は私の説を褻書きしているように私の著書を読んだ人は知っているように、私は月の生命や草木

育法 たちは知 けにゆきません。 でしょう。 分の理解 それならな も完全に恐怖 を用いて混 って して かし いな いる ぜ事 乱 実が しかし真相 その理由はあまり多過ぎて、ここに列記するわ を脱した人はまだいません。 からです。一般人は恐怖を身につけていますし、 物事を恐怖しやすいということを右の権威者 発生を防止しています。なぜなら、大衆は自 一般 へ公表されないの を知っている権威者たちは緩慢な教 かと、あなたは

氏に ン 7 ュ て H 四 バ y 年 力。 べ ス チ 月 成 1 y る全文 九 シ ク を ラ 日 参照 備 ブ は 政 z た て れ ŧ 府 ス Ø の な です。 V わ れ 口 関 た ラ と接 或 1 る チ 触の 演 ウ あ バ つ * ス た 粋 ス ァ で

告に 動以 を米空軍や 土五 た知的生物 F のような 0 (定 聖書の 年 来 ≱Շ 上 するも の大混 前 ₹\ て Ø 体 記 米 時 サ 代 乱 不 厶 政 Ø 録 K 1 明 ょ K 府 フ が が で、 ソ まで 公表 発生するであろうし ン ・ 才 が の っ 発 飛 て 敵 - 1 行 Z され 表 意 ゥ 操 1 ェ 将 し 縦 は 体 カゝ るなら 3 軍 の ようと 持 ル ズ れ たな は Œ が 確 0 て 次 る 不可 小 し 実 V٦ のように ば大恐慌を起こ V 説に な る K が と思 <mark>لان</mark> 存 解 地 端を発 な空中 の 在 球 わ 霄 K 人 ڔٞٵ は Ø 明 れ 理由が る L 力 そ し Ø とい をは し、 れ て 物 た火星人来 は お 体 ります。 う公式 ある。 大気 る K おそらく 関 ŹΣ 圏 K す 襲騒 記 る も. 外 報 駕 カ

近 う ķ١ ーバニ 怖 は 信念で ます。 受け取 な もの Ø づい V 在 正 「自 K であって、 ば、 ₽ これ りま ています。 自分 分 であ て 9 ð て は Į٠, 私 る ょ は し 恐 る 自身を見 て置き代え は 肉 た。 Ø 怖 W からです。 それ 体 家 を発見 でし ì その 族 Ø 如 を持 間 不 は 何 つ ľ う。 られ 健 な F め する Ø 2 そ 康 ラブ 間 ۲ る る 7 恐怖 ラ で 多く れ な Ø 社 な は 会の 5 は 原 N V ブ V 因 社会の ₽ ば 限 は ル な Ø ľ あ 理解 を並 でも みな う。 い」と。 人は り深 5 自分の内 ゆる ことで く荒ら あ 理 力 ベ 大抵 不幸のもとをな ĝ ح た 解 ます。 信 て 病 力 の た多 言う 部の 念 し 毒 Ø カコ 続 の Ø は どこか 原 不足 数 なぜ 足 办。 け だ 因 も \mathcal{O} る K れ ず大 よる ح 手 ガ なら K 紙 な れ ン

> 間 \varnothing 理解 れ な 力を超 け n て ます。 らないのでしょう? それは神というも ているからです。そして恐怖はわれわれの文 せよと教えられてきたからです。 な ぜ

く根

ざし

に及 ことに ぜで が主人となって からです。こ の恐 個人 史 し ん にも 怖 なります。 ょ て から ろ? 或 報 K ょ つ 種の の つ カン V ح み て て دلا は、 ために創造主に頼らないということを証する 性にされてきました。恐怖は国家は 怖が原因をなしています。 る不快な状態のいずれも、 怖とは創造主にたいする信頼感の欠如である」 かるための道を縦横に敷きつめています。な 人間は創造主たる神を信ずる一方、恐怖 個人 無数の生命 7) ら世界全 かりでな が何ら

ます われ 食などをやる人も 価 ね は 値 間 ば な生活をして 国 は を見 恐 自 なら は な はあらゆる あ 分 怖 V さえす を知 な りませ を ح 除 V V 6 \varnothing う 自由にし、自身を理解させるかもしれないよういる有様がわかります。れば恐怖に基づいた霊的な教えのために大衆が ん。なぜなら、われわれ人間は自分の本体を知ありますが、恐怖が存在する限りこうした行法 ない限り、自分の本体をも恐怖することになり K どころか、人間に或る程度それを植えつけない 物事を探究できます。たとえば冥想、 ことを私は知っています。インドその他の極東 恐怖はそれを妨げるからです。そしてわれ 祈 ŋ

それ 理 た で、 V す は ひ る恐怖 個 さげ 人を て指導者が が大きすぎて、個人は真理を見ることができま 多くの人と交際してきましたが、だれもが自 現われても、大抵の場合はその指導

は一 その きな保障 なりま ん が 更に で、 隠さ 多い 世 怖 恐怖 Ø を避 れ ٨٥ はな 自由 自 れ 体 事 た て 自分 ح K く V は "強さ" なる な ž のです。 れまでし る 暴露を恐 ようとし Ø Ð ٧٦ 知 ため ので とい 弱さ つ て を見 怖している」 うことを示 V ばし K 洩らされな てあらゆる であるところの ます。 は 弱点の ば つめ 述べたよう ح る 泉露が Ø 弁 Ø L ٧٦ Ø Ф こと 明 を恐 て 信念 です。 Ø を います。 行 し は れ は K ます。 な て と な そし 般 神の 置きかえ わ **لای** ـــا V 人 れ 換 て、 とあ て 保 言す は ね し 肉 自分 障 ば 773 以 5 ŋ 体 れ し な ŧ 上化 れ りま 聖書 の ば す ね 心 て 大 ば 世 は に

行 そ ż ľ う K りいれい 自分 れ K ます。で、恐れ で な た ね 長 Ø 恐れ はこ が ば 面 だ 要素 なり 面 する ば Ø て ~ は の とれ れ め カン きる 怪物 ませ ゆ を再 後 ŋ 信頼 ガゝ る は で る つ Ø K K 悪い 実例 ほど 例が なく、 ある です ん。 感 編すること (恐 Ŋ は Ø> 無数 ح 怖 真自我 あ そのときこそあ が 信念 L 何 を な 更に有用 K し カュ Ž٦ であろうともそ たがこれまで知らな を持 あり も漕 たと 5 を知 にな Ø な若 かます るで 思 実 が り始 K れ W 出 Ą なた る める し 定いて 発 K し ļ ້ອາ ອັງ ອັ う。 は は で れ し い生活を 知、恐、震識、怖、悪 恐怖 なけ どうす K 自我 70.3 *دول* ょ を有すか う。 K 力。 れ つ ŧ すご れ 打 ば た かを た ち ŋ な ほ ば 勝 ŋ یج す な は ょ ま 個性 た ķ٦ て 9 要いたいめ 世 で 大 め

とな う Ø ラ Ž٦ K が ょ れ F を ようとするよりも、 V の です。 つ けら なぜな れ るこ 5 とや常 自分 プ ラ に不 を謙 1 ۴ 幸な P 虚 恐 K. 状 怖 公 態 は 間 正 7 あ る つ 7

> の あ て 丁宙の中に地位を持たないからです。

りま 感 住家 謝 た 平 W の し ます。 帰 この 思 りをも 9 ō たか そ 文明においてこの講座が最初だと断言してはばかます。私は、人間の根本的な基礎が人間の注目を らです。 講座は、それを(その講座を)実習している人 識をもたらしたプラザーズ(他の惑星の兄弟) たらしつつあるという事実を感謝してここに報 の知識によって宇宙の高貴な魂の持主たちが元

の

K

す。 され れ に混 教や修養 るの 無数 そし 乱 る で も そうすれ と生活 究 Ø す。 聞 の 生 命 で元 て求道者が如何に真剣であったにしても、それらは本人団体など)によって道を求めてきたという事実は明白で であ かる され の科学 の住 ば の不安定以外の何物をももたらしませんでした。し ŋ す あ りとあらゆる名称の付けられた各種の方法 家への道を歩み始めています。「自分自身を知 べてがわかるだろう」という言葉をわれわれは 心の指令でなくして意識の指導によってなされ います。これは恐怖でなくして信念によってな 講座を実習 している多数の人は、わずか数カ

ば、 するぞとお 生活を送る 7 の ح た 世界を破 れを学ぶ ځ る 人間 どし は め 分を知ることは)非常手段なのではなくて真実 信じないで恐怖心に支配されている世界を破壊 にさほど多くの時間は残っていません。なぜな なのです。ところが今日の人間の振舞から見れ してやるとおどしたのは悪魔ではなく、人間こ いるからです。

才化 なる 婦人が過去五十年間あらゆる種類の宗教、

生の 間と金銭とを浪 彼女は正常 ら生活 犠牲に があ 講座 て 大半を、ただ自己の 各種の教義の 見い はうれ しています。 の他精神主義の各種修養団体をあさっ ります。 Ø な真実 出 研究 する 彼女は自己を理解し を楽しみ始め した恐怖を除 費 によって万物の一体性を理解 彼女は 思 禍中にあ L の生活に いろ異常な生活をすごし この他にもこれ たの って です。 本体の てい ただ自己を発見したいば います。 返りつつあります。 いて って混乱するば ・ます。 始め、 発見のため U "真実"を置き代え ינג その と同じような例 し自己発見 長く 講座 探し た K カュ は の りで の し そし です。 を達 たと 求めた自己の本体 彼 始 みあらゆる物 るた 女 力。 し りん た て 成 が た。そし が多くあるこ 多く する からです。 ために、 し 英大 て 生命 *2*02 Ø 今や を喜 て わ な 0

円盤の目撃に関する報告

す。 は メ キシ コ 市 Ø G A P IJ 1 *P** ŧ カユ ら送られた二件 の報告で

X

から

出現し、数百の人がその現象を見た。<一九六四年六月十七日>ファレス市の上空に円盤(複数)

され 目撃され Ø するの 惑星 が て בנג た。 見られた。 市 ら来たと思われる二個の の上空を二十分以上に それ は 付近 ボ ル丘 の数 の上空に 百の 円盤 わ 午後 がは た 9 が て旋 っきりと見た 阼 頃約 日 夜 フ したり上下 十分間 7 ス から 市上 観測 K

は円くて飛行機には似ていなかった。

帯び た。 めに そ Ó 北 輝く Ø 九 続 六 た め運 運輸 火の 四 て 青 球を 会社 六 転 光 士 四日> 見た。 線を放った。 Ø スを道路脇へ突っ込ませた。 バスの運転 そ 昨 夜多数 れは大きくて、緑、 それがあまりに強烈 士や乗客全部の目をくらませ の人 が エルモ 青、 IJ シ であ 赤色の光を 3 -م たた

星の残 ちであ 上空五 運転 士マ が V 中 だと考え ヌ 宇宙 エ 船だ N Ø あ という人もあるし、 ている人もある。 たりを通過 マガリョンの話によると、その物体は した。目撃者たちの意見はまちま 米国が打ち上げた人工衛 バ ス Ø

X

粉争の を撮 は どあ 6 六年の十月に見 办 円 ァ 私自 グ Ø る あることを示 依 りませ る デ 報告 起 然 可 ァ 宇宙船 目 ۲ ح 力 を私 つ 性 して エ ん。 何 IJ コ* は て エ あり 付近 を見 ま いる 地 は た ン 夕* 受 Ø れ の 球 ません Ø ス け取り と似ています。このいずれにたいしても写真 たのはこれ た。また八月十二日午前十一時三十分に、 地 へのドライヴ中に、二個 人の活動を観察していることを示 丰 空中に巨大な宇宙船を見ました。 域では一層この観察が行 人間が次第に創造主の目的から います。 Ī 感じられな でした。 つ は つあ ケ これ が ア りますが、このことはプラ 最初ですが、これは私 世界中で発生する多数の目撃 IJ が続けば い場所は フ オ |-= の宇宙母船と十二個 或る種のカタス 全地球上にほとん なわれています。 ア州ジュ 離れ しています。 火花を放 が IJ 7 一九四 てゆき ン þ 私

す。 すが なる過 が ح 力 やれ れ 大変動 は マ 必ずし を作 恐 る 誤をも受け付 怖 で る に至らざるを得な も 主 ことにな 人 う Ü 人になっ 地 よ け る ķ٦ な も て 77.3 V らです。 0) Ø V で、 るというのに、 ではありませ い 修 で そし E し は ľ て、 人間 う。 W 果た 創 K U 造 カン 主 カン て人 の 同 再 て 目 度申 間 的 V K ま は は

体の心 ば 持つ です。 中に居所が る人は少数し ようとは 理解する 自己破壊の方 るその少数者 ことや自己の ています。 直 間 知識 が生命 面 自尊心と金 K 力。 夢中に U と が ませ そ なく な 間 向 けれ n K Ź) à 世 は の な 特に いませ 充 を望 わ 力 な ん は へ突進する 銭 時 ば 分に る 中で実際 れ は 9 ならな 人間 間 て む人 神 が 自分自身に わ ガュ できな ん。 ٧v を れ の 人間の主人になるとき、 らです。 る K 計 は 0) カン ح Ø K ガゝ 感 画 エ わ けて自分自身 い不快な未来を減じ得る機 を食 Ø 何 らです。 ⊐* 謝 K カン 少数者 2 な l (自我) が行なわ ち与えられな し カン る い て ķ٦ 6 7)3 っです。 よい し、 止め て 家 そ が P Ò や生の 生命 その はあま る れて でし 中 して過 9 K とよく 202 線 ある どうか は永遠 ひ ょう。 V を守 激主義 目的 る ŋ 限 神 に自分 ŋ カュ ことを知 は 知 を理 人間 その少数者 であると は 9 などを研 5 が暴れ て、 会は て 大きな疑 自分自身 解 の住 ٧٦ あ 身 大衆 た 家 ま 究 りま な て て 問 を 肉 5 ろ Ø わ 2)2

手紙を受け取 最近ま です な で或 b とん りま 解雇 る州 立病院 した。 されたの します。 ここでは本 で働 です。 この人 V て は 以下はその理由を述 V 病医 人の た 一 です ため 人の ばら 医師 に氏 から私 名や州名を明 ٧٦ 仕 べた手紙 事を は 通 Ø

> 創造的 な人 は州 いな て を Vi 受け る で、 まっ正 入れ 神 またそ K ح 病 医 9 直 なことのできない人間であることがはっきり だ。君は政治的な策略を用いることを知って 勢ができていない。君はあまりに活動的で、 言葉を引用すれば はあまりに優秀すぎる。この州に 次のようになります。 は君のよう

的な仕 個人的 現状 中の きま 設を牛耳っ の目 に病 いま 不幸 存在します。 ができるで わ 놘 的 の 世 Ø わ 事を 個 を常 人が ま ん。 以 遅すぎないう 中化 る暗 な野望に 外 ま は精一 も存在 雲は そし の 政治屋 Ø 態に \$ 病 て 例 人 何物 **つ** 政治屋 V う? ? 3 支 る場合、 て で 復 銀 て K <u>の</u> 世 配されているからです。したがって諸国家を覆 す。ころした状態は世界中の多数の公僕機関に 色 する筈の明る うのに 汚ない たちはもはや人間または神の気品を有しては も関心を示さない政治屋たちがこのような施 の裏面を持ってはいません。 間の善や愛は しめていました。 たことを私は知っています。予想以上に ちに人類は目覚めるだろう」と考えるだけで いるのはころしたクラスの人々です。 以上は公僕 どうして一個人が病人を救い続 全く創造主の英知に導 やり方に屈服しようとしない多数者の い半面が失われているの意)それ と思わ 彼らにはわ しかし、自分たちの政治上 れている人々の一例にす かりません。 カュ (訳注。どんな れ な けること がら 世界を 極端に 奇

講演旅行

日曜 1 集 会を中止 た 十五 ヮ **ジ** ব 日 9 サ て九 K チ 私 L ュ ン 月十日 ます。 は 市 1 セ ウ 向 1 ッ ッ 办 ス け ら十月二十五日ま コ て ン その他 シ 演 旅 ン の諸 行に出発 州へ行 イ IJ では ける ます 1 私 力。 Ø も 宅 U K れま **7**6 け 丑 る 世

を伝え げていますが、 の自由こそ私 うとしてい K 9 たと断 関し たも て或る の るというデ では に割 ァ 言しまし ح 夕* れた り当てられ 種 ありません。 人 Ø ス ょう。 丰 は マもその一 噂が 独り身の完全な自由を必要とします。 1 Ø 流 妻メ た計 され 私は人生の 私が中西部の若い つです。 IJ 画 て の遂行に不可 V 1 ますが、 は一九五四年に死 残りを現在 私の妻帯 その 女性 欠 生活 の の仕 ٧٦ と結婚 も 4 のなの 事に は れ だし す も真 ささ しよ で で ح K 実

質問に答えて

う表現 ラッパ か一方のラッパに 個 れ 格を になっ しな ま てみますと、 は で私 的な自由 ラ 発達さ てく 73 K 相 K 協 を有し な 互 れ 世 な カし るた بخ K 各人 Ø ることを選 っ 頼 は てきた た て わ め Ų١ は ∞ ん ています。 神 Ø \mathcal{C} だ覚えはあ د(7 ることが らな の計 働 ラ V ん ッ パ て て V 今後 画 わ 私 で K カン V ま るだ りま も協 な 人間 は カュ だ ょう。 ります。 9 せん。 て れ の観念か、このど けです。 力 しよ K V たい る 私 理 率直 自身は うとする人 Ø であ 解 しても、 U を通じ K 力斗 言い し子 神 つ て Ø ます ちら 細 私の て各 目的 は ۲ K す

に、ない。 問>聖書に述べてある『許すこと』の法則について詳細を説明問>聖書に述べてある『許すこと』の法則について詳細を説明

ただ神 とは され よっ さね は なるでしょう。 ります。 かりで ることになります。 つ を遂行するべ 何 原理を受け入 は あ で てだ 慈悲 は K ね K ば 類 て きませ Ø な け 報 もなりません 障 創 の な なく それ ばなりませ い 取る 惘 を持 たが わ 造主 害が起こ 教義を研究 りま 各機会 n るよう れ 則 Ø しますが は かを 寛大さを 者は 自分 ん。 から 観 たな 臣 行 0 念 n き機 は K ん た n な を Ø そ ります。この発見は個人の自由意志でもってな け ゎ ん て 持物す 与えているのと同様です。イエスも地上の報 であるからというのでそれを行なうのです。 全然持たないで何かをなすことを意味します。 0 していても、自己の真自我と進歩とを発見す この修正を行なわない限り、あなた けたならば、相手にたい えば、あなたが宇宙の法則に従わないことに なるものなのであって、これは個人次第で異 会(複数)が与えられているのです。だれも 各人は一つの運命を持って生まれていて、そ それによって生きるための機会を次々に与え も意味します。 れた過失の修正のた 時間は無限にありますが、 は無意 に入れ 何らの 聖書に 修正をしないでいくら善行を積んでもそれ しかも他人があなたに代わって介在するこ この世の報いのためにのみ働いた者はその べてを与えても、生命まで投げ出し ない 感 は 味だというのです。ここで慈悲とい 謝をも期待することなしに日常の 次のような言葉があります。つま と言っています。だれもが良き それ めの追加 は個人にた してすぐに修正を施 機会には 時 いし 間 を与える が如何に て 限度があ て

からです。良き物事を見い出しはしません。人間の法則は神の法則に反する

自分がお なら本人が歩む道は傷つけられた相手の道と決 させなくして、 すも かした過失を修正するのを妨げます。そして人生の目的 らです。 許 U カン もほ も明日では遅すぎるでし 修正をする機会を永久に失わせます。 と んど同じ 意味です。 して交叉すること 誤 9 た自尊 なぜ Û は

の方法 地から友人が訪問 そこで本人は しい年でした。 この人は英語の読み書きはできましたが会話は苦手のようでした。 います。 心から感 さて、 がうまく 私もまたそうです。 謝 夏もまも し 質問を紙に書き、私も書いて答えました。しかしこ てい 少々くたびれまし V まし してきて、 なく ったのには驚きました。彼は与えられ 終わる た その結果彼らは知 日本からは一教授が訪ねて来ました。 でし たが楽 ょ う。 し 今年 い日 は 識 々で これまでに が豊富になって した。世界各 た知識に な ķ٦ 忙

生きて 念とは それは未来 して内なる人間すなわちエコを包容し 念であるからです。 れゆえ信念と意志があるところには常に道があるのです。 います。 生命 人種、 は言って あなたは信念のある人をそれと見分けるであろうからです。 を持ちません。 が寄りかか 教義、 もし います。 イエス エコ 自我の意見などに左右されない信念によって っている 『宇宙 がこの種の信念 良い実を結 が言 宇宙 の実を ったように、実すなわち仕事によ の岩 みの てい ない木はことごとく に従って行動しなければ る人体を支えて らせる " であるからです。そ Ø は ح の種 切られ いる神 0

火の中に投げ込まれると。

分野で そし べてに 生きる目的 て 謝意 多く の仕事 を表 9 は 宇宙 たいと思います。 を達成したということです。私はその人たちす 的性質を帯びた実をならせることにあります。 来た訪問者たちの言葉によれば、彼らはこの

下しています。 とのあいだに存在 する あるとも聞 ら来た人 むことに 知識 旅行 可能 の子孫が は にするた を直接に 旅行 いてい そ て いま の地 きに、この傑角ことしている神秘を解消させるでしょう。 また、 得る目的を有しています。そこには他 す。メキシコへ行った際は来年ユカタら帰ったならば、予定どおりの未来の ます。それは現代の文明と過去の失われた文明 まだ住んでいて、 域 めにあらゆる方面へ交渉してみるつもりです。 にかつて存在したことのある過去の文明 私がたいした物だと思うような物がそこに 現在もプラザーズとコンタク 未来の段階 ンへの の惑星 を K

法を調 に参加できる、 種の設備をしなければなりません。したがってどちらか安上が 合に待避線 る必要があります。 機会が来たと 加できる、時間的にも経済的にも余裕のある、正直なまじめまたは必要とあらばそれ以上続くでしょう。私は、この旅行い方を選ぶことになります。この探険行は一ヵ月ないし三ヵ てバ 査します。 ያን スにするか汽車にするかを検討し、いずれか最上の方 へ入れることのできる寝台車と食堂車をチャータ 照会を望んでいます。そして関心を持つ人の数を知 ています。今年末メキシコに滞在中、 もしバスにすれば、遠距離旅行にそなえて 車にするならば、一定の地区で停車したい場 この探険に私と同行できる一団のメンバ との

ることによって予算を編成します。

推移期であ ています。 最も必要なときに去ってしまいま 回 一人は多年とどまり、 ″最近 人から照会が う たからです。 の 情報" ありま で助手を必要とする旨を述 他の一人は二年間いましたが、 ブラザ した。 l ーズは今それ た。当時は 最初 Ø 助 調 を選定しようとし 手たちを選 査か べました 6 研 彼らは 究 ん とこ で以 の

私は リスト 力。 画 つ て の遂行 K 2 を望 たことの 9 て W V る で ことを ある いる すば 四名 知 5 Ø Þ て 人 حے V ます。 組 ば 小 \varnothing ح 夫 りです。 Ø 妻 人た が ブ ラ ザ は み

は から六十日 画 なるならば自宅に設備をふ 丰 一人用の設備 にお シ をブラザー コ が待 学園 たてば、 7 つ 5 て ズが選ぶ しかあまっ 年 る 現在の本部 地位 カュ カン らです。 つ てい が が与えられることになると思 **70**2 開 わ やす必要が で働 ませんが、 カュ カュ 現在ヶ れるな る く助 て らば、 あります。 7 ょう。 手として右の もし要求が右の ij フ 協力者全員 オ ł それゆえこ ニアの 、ます。 とお 自宅 は. そ

☆

それ 国の或る大会社の社長であ 九六一年十一月十七日に京都でこの 者付記 奈良を見 米国 の 或る 物 の 右の に来 途中日本へ立ち寄 通信社の特派員である たということ に出て Ď, 来る アダ で 9 たわ ム 7 スキ グ た。 けで、 人に = ŀ 編者と <u>-7</u> ン 会ったことが Ø ァ 1 夫人 親友です ス バ ン氏を加え 同 ン ン 伴 ス ス で秋 が、 ン ン 夫妻、 あ りま た計 の は 編 京

> 単な記 です。 の内容 せたの 落な性格の てい ッ る は を洩 事 編者とバ ス このとき痛感 と言ってい を掲 ほ 1 夕をすご ア ダ 5 Ł とんど た。 持主であ て て ζ. ŧ ま は ス ァ の二人だけで二時間ばかり語り合い、きわ 食をとりながら二時間 したので、 しました。 って、 たの ムスキ たのが、 1と呼び、 ムスキー 米国実業界や政界の裏面に精通した人 バ氏は当時四十六才、大男で、豪放磊 は、 1問題で、このときバ氏が或る重大 当時意気消沈していた私を奮起さ こ記憶の方もあるでしょう。 このときの様子は本誌第二号に 日本の円盤研究家は米国の国 を心から尊敬していて 経済的にも援助の手を差し伸 ほど話し、 更に場所 プロフ



パンスン氏と編者久保田八郎 京都に

特に のはまだ可愛いほうで、 インチキだと騒ぎたてている あったように、 ようです。 があります。 個界研究, 米円盤研究界の内幕に如 ることを知っておく必 いってもピンからキリま 中にあると言ってよい は恐るべき陰謀と策 かということです。 "円盤研究" イエスがそうで は大ホラ吹きだ と同意語に 真実のコ 懐疑 ン タ

あなたはなぜこの惑星に生まれたのか

C . A

す。 ち え古 の疑問 現在の生活状態に満足せず、貧乏な暮らし方をして、 たところ自 の焦燥感を満 るのです。 の地 今日或る またな つまり 疑問 てい や問 上の生命のほとんどはこの状態で消耗されてしまい、 の人生で何 カン 題 "自己発見"を試みなが あ人 の カシ 解決できても、また新 たすものを常に は もあります。 解答を発見できないままに終わるでしょう。 何も進歩 自分が Æ, は大きな問 か特殊な仕事をするために生まれたことを していない 一定の理由 こうした感情の 発見 題 \sim しようとしています。この î らも、それ 直 のもとにこの のにひどく 面 い大きな疑問が起こって来 し てい ために本人は自分 悩んで を達成する るよ 地上に生ま うに 自己の V 思 0) わ に見 れ たと 自分 人 れ け た 0 で

来て するのは全く 一つの事柄 何であるかを意識 た目標を持 あらゆる人間 ている います。 物事 だけ 9 てい の時間と労力の浪費であるということです。こんな を実際に達成しつつあるの は は は 的に知って 一定の理由と目的 るのですが は努力し っきりし な いる ています。すなわち自分が行なおう けれ 私が言える限りでは、その目標 ばならない 人はきわめて少数です。 のもとにこの かどうかに 殴りでは、その目標がい或る一定の予定され 地上へ生まれ ついて心 しが 配 て

> をやめ しあ るでし な Ø るならば、 た う。 物 が それの な そ りません。 が実際に達成 運 益な印象類の れ 命の)なすがままにまかせて心 が(運命が)あなたを探し求めるようにな あなたが持って生まれた運命は、も ほとんどすべてを排除すること するのは、自分にとって感受で 配する こと

または する物語は、この点を 大な哲学者の いることを哲学者の 過去 して人類は過去 い思想や目標 自分たちが の歴史に ほと お を持ち込んだ指導者群が出現しました。これら偉 堕 Ø 説明しています。 す どすべては一つの共通点を持っていました。 てさまざまの時代 ゚ヷ゚゙ ゚ヹ べては説 した位置から元の高さに昇り直そうとして ルよりも高く発達しようとしているか、 ١Ų٦ たのです。"人間の堕落"に関 K 衰微する文明の 中 ~

ちは、 で地 た。 たわけです。 球 人間の この太陽系の へ連行されたことを意味します。傲慢な利己的な厄介者た 堕落』 彼らは Ø 物 地球で自力で生活するように仕向けられまし 内外の各種惑星の文明から隔離されてしまっ 語は、 地球人の租先が他の惑星 から宇宙船

星からこ いて、 て描か ㅁ == 者だちで、 書中に 7 れ に起源を発す ています。 はこれ 地球 との地上 という 来 同じ る人はすべて聖書の時代には天使と呼ばれてへ強制的にとどめさせられたのです。他の窓 Ø ٦ る伝説であって、 ح れらは自分の心が利己的になってしまった は実際には彼ら自身の利己的なエゴでした。 惑星とその発達に関心を持った人に二通 伝説があります。ただしそれ サタン及び第三の天使 は古代 とし バ

り、 々 へ帰 は K 1 かる は れ プ "天使"と呼 なく があ な 間 堕 る 落 つ Ø \sum_{i} 堕落 しな た人 ばれ、 ゕ゙ V は わ で依 K かります。 遊落天 関係あ 今日 然と は高 る して宇宙 使 ح 度に発達 È Ø ع Ø して 地 とされるように 0 球 法則を活用 知 ^ た惑星 連行 られ るよう \$ n Ž٤ ら来た して な 7 りま 元 b な 0

宇宙人すなわち訪問者とし

て

知られ

て

V

ます。

いる人も 真の意味を誤解 神学者や聖書の翻訳者た K は 人間と考えて 今日教会が 言及したも です。 あります。 肉 の V してきま 欲と呼んで もちろ る であるということです。 が した。 ちは ん あれ 真の ば、 いるもとも 解 長 サ いあい 答は、 刄 ツノ ン を超自 の 生え だ بح サ タ 利己 これ ンと訳 然 た サ *タ* 赤鬼 的な 的な は言 ン だと思 力を持 z V٦ とい れ ガュ え 間 た各 れ の つ生 ろ つ 性 種 て

あなた わ ちさまざま りを経 間 が る は は は 々も同じ ほ の 本来自分 ょ つの 惑星 れ て地 の過程を経 どに発達すること も 理由の よう 球 に生まれ 0) の 卒 ·樂 # な理 エ ゴ" 人間 B て はゆっ る理 由 の時 とにこの地球 が強 **/人間** て に達 が 曲 地 4 その理由です。多くの死と生まれ はきわ 球上 ため く の性質。 りと進化 して次の K K 生ま 上に生まれ B 地 7 に打ち勝ち、 球 高次 n 明 の階段を昇 上 確 る ^ な惑星 置 K 0 まし なっ です カュ れ 一で生ま それ から、 っ た。 たの てきます。 ています。 を変 すな で あ ħ 化 わ ŋ れ

動物 てあら 界 人間と高等動物との K ゆ お る物 Ų٦ ては、決 事 が行 して変化す な わ あいだに れ て る V ŧ ح す。 との は大きな相違 な 動 い 物 或る自 は 本能 が 存在 の

から

推

理力

間 ほ て ど無限 ます。 の推 と自 理力を持っていますが、 れは一定のパタン(型) 由選択権とを持っていますが、 動物は持ちません。 に従うのです。 動物は持ちま 間

をだれ それ した イエ 由です。 であると言って 自 を受け スの が 画 曲 を提供する K 2 K ょ ح 志 て うに れ 決 と自 S だ れ て は だけ いま ただ て押 高度 る があ 曲 カュ 択権 で、 す。なぜこうしたやり方が必要なのでしょう 真価によって(つまり個人感情を加えないで) な惑星から来た指導者たちが自分たちの教え 拒否するか、進歩するか停滞するかは全く自 なたを援助しようと指導しようと、あなたが しつけようとしない理由の一つです。 基本的なもので、きわめて必要なも 受け入れるか拒否するかは全く個人次第 はこの地上で展開している全面 一的な発達 のです。 彼らは

スン 理矢理 です。 前に先ず本 いる場合は そ れ を す。 個 する 個人 は の K です。 或 人は新 が実際 特にそう が の異なる 自 でし る 多年 分 知識を は Ø を用 ょう。 自分 Ø K. です。 あいだ同一の思想や哲学を習慣的に信 生き方に強制的にあてはめようとしても 学ぶ唯一の方法である 質を作るのに役立つところの人生の真の 押しつけようとすれば、 古品、的体験や啓示は役に立ちません で解答を求めなければなりません。それを無 い、または異なる物を自分から望む必要があ 個人的体験を通じてのみ人間は学ぶことが ないで盲目的な本能に従っているのと同じ 何 カン の新しい思想が個人の心を捕える ため 本人は力一杯にそれ に必要なの 奉して です。 y

する はや たときの一定 どに発達することは なか と同じ 簡単 ったの の です。 K な V ヴェ なります。進化 뱐 ŧ かとあなたは考え し人間 間 ル る本能 にとどまるだけです。 不可 が自 によっ 能 などは になる 由意志 る て あ 宇宙 で \$ 力。 も 推理力を持 り得ません。 ょう。 し の 指導的 法 れ ませ 則 に従うよ たなけ ん。 な能力を有 創造され その れ ろ

なふう にやれ 発達さ こうし ことに けです。それがこの発達の段階に 宇宙を支配する 進化 ッス ンまたは る ほ とは実際には 世、 にして絶え間なき発達 て進歩し ように カゝ 指 なりません。 導者にまでな 過失 仕向 てゆくと、 ″支配的な から学び取る けることが必要なのであって、 間 そ の性 力。の一部になれるもくろ達があるのであって、結局 われ れ れは行為と体験とによ るの 質と健全な道 わ おける n 力を持たねばなりません。 です。他人を自身 は結局健全な性質と道 ⊐* 徳] の原理を発展 ル です。 ってなさ 同 の われわ みい 時 意志 に本 がつく させ Ø n ます。 ħ 人は まま こん とを わ は

当な人 けませ して自分 あな 要か ず 自分 物 事 た Ø ゆ や仕事に出会うでしょう。 が Ø 0 そうすれ 潜 を知 真の運命 知 9 さもないと必要な出来事 在意識 識を持ち運びます。あなたの人生の た ただの実験台になるために ろうという貪欲さを捨てて生活 ŋ と ば適当な時機に適当な物事が現われ は、 L を遂行するの た気持 体験によって学ぶの で自分 に必要な環 問題を強行 Ø 0 興味 出現を遅らせるだけです。 なひく物 現われるでし 境を与える に如何なる を楽しむのも一 し ようと いろいろな場 事を研究しな るでし して ため ょう。 V ツ は ス Ø そ 方。 面 う。 適 ン

WITH TO THE TOTAL

月と火星は地球とコンタクトを望んでいる?

て再 の若 る光 カュ 斑 ね などが て 妻 題となっ 力。 ら月 加 一個 問題 て Ø なっていたが、ごれについては最近帰宅途中山々に観測される閃光や火星の表面に見られ 神秘的· V な光体に追われたのがきっか けとな

観察さ に輝 F 百万 な ラ た体験 1 い。 V 明 マ בולל れ て 1 . } を暗 科学者もそれらの説明には当惑しているのでちた神秘的な光(複数)についても筋の通った説 て ルも W 米空軍は た木星 V くさせ ない。 離れ すなわ た木星が一体どんなふうにしてそれをやったかせたりしたという現象を、地球から四億三千八わち光体が車のラジオに影響を与えたり、ヘッだと片付けてしまった。だが空軍は、夫妻の報 例 によっ れらの説明には当惑しているのである。 また空軍は過去から月の表面 てこ の 夫妻の見た光体をその にきらめくのが 月中夜 明をし

光 を受け 天文学者によって またそ て 一九五 烈に輝 側 V 壁面上 る白色光が発見された。その光は約一時間半ほど続いた。 短 Ø 六年一月十六日に、ケアリフォーニア州ウッドランド て暗 年の一月二十四日には に閃光(複数)が見られた。そのとき火口は太陽の の中 火口の壁よりも少し輝度の高 から出現するところであった。 その後次第に消えでゆくのに八分か 月の西側のフチ付近の裏側から連続的に 月のケァヴェンディ い光が出現した 閃光は約三分 ッシュ火口 力。 った。

П 側 て 閃 光 K 0 反 位 射 置 光 か かる 見 5 3 れ n た た の で す あ な わ ち 閃 光 Ø あ ٧v. だ

以 とす 上 の る方 ガジ 法 \emptyset であ 則 報 告 正 は し 9 月 た 出 נע カュ 現 6 P す の L 信号 れな る 0 ٧٦ は と こ ع 釈 単 ~ K し てよ 暗 示 定 地 い て 77) 4 V も 注 る し 意 れ な を 引 V

切

た方 送ろうと できるの 九五 日光 法 光 ガュ が た で 力工 である 一定 も 九 Ų٦ つ の ケ 年四 う て の 陰 7 の光 実際 次第 とは K IJ 月 な フ 線 考 + \varnothing K っ オ を変調 試 消 Ž 九 た み え 5 月 日 = で て Ø れ κ ァ できる あ V 州 な 暗 は 黑 N 9 ス つ た。 0 た 刄 月 の 0 面 部 力。 ン 5 これ で 分三十秒 分 K フ 連 は \emptyset 才 こそ月 ない ح 続 中 れ 的 K だろう 見 ほ で K カュ ら観 知 輝 یج え カュ 6 的 た ジ M \varnothing 測 な 力。 ッ T メ O 信号が送 ツ. と で、 ٧١ 電 乜 輝 れ た 波 1 Ш た。 V た後 K . Ž 頂 つ 似 を そ 信 K の

デ

星上 を に観 暗 測 K 示 3 れ る て 活 W 動 る Ø は で 月 は あ 面 る 上 ま Ø 発 信者 カュ と 思 わ れ る 者 **Ø**

の

一九五 五 bi ウ なふ 変わ 厶 を意 四 口 年 と ケ カジ 口 急速 呼 ろに 七 り、 四 味 ケ ッ す 八 ば 年 月二十三日 ッ K る 秒 解 の発射 更に 一月 n ŀ る砂 と思 釈 輝 力》 Ø 五 40 き始 ---発 カュ 射 漠 地 n とも考えられ 秒 日 わ 9 とす れ 後 ~ K め K る。 る。 次 火星上の 帯 K た。 通常 第に 今度 火 れ 加 三秒 日 星 别 ば Ø 本 弱 \mathcal{O} な は 黒色に 光輝の 同じ る。 くな 光 ほ 赤 可 カュ 能 تلخ 6 道 輝 性 ŋ 観 し 場 て K が三 時 所 も 明 測 あ は 2)3 間 + て し بح る され るエ り V 秒 発しそ 2 原 Ø V 間 見 n た。 黄 7 子 長 K ۲ 消 3 ガュ 色 Z V で 工 L 5 強 れ ネ は カュ 之 と た。 • 半年 強 れ 6 さを た活 て プ N 強 カ する は ¥ Ħ 增 後 烈 な ま 動 火 Æ ح 星 \varnothing な <u>ر</u>م. は ン 口 突 白 た 少 力。 1

> な わ ということにあ

験

質に て 来 的 怒 弧 をえ の 办。 測 な 星 ٤ 毛 た 日 力。 な し 光 は て の Ø そ K ス が は異様 衛星 カュ は 一八 り た 水 点 観 で の 強力 考え あ 或 の 年 亦 測 日 V 七〇 る 望遠 星 だ る \varnothing 3 た。 な、望 られ とも な 色 付 t 年 色 は Þ ت 鏡 そ て 遠鏡が火星を観測したのだけれども、 ないような周期である。しかも一七〇〇年代 である。またこれら衛星の公転周期は中空の 濃くも淡 によって人工的な物だと信じられている。 考えられる。もちろん火星の衛星フォ れも火星の成層圏を飛行体が飛んだのを始め の視野を横切るのに十秒を要し、 れはその惑星より少し下方であった。その神 いたとき、かすかな光点が望遠鏡の視野を横 で最も驚くべき現象の一つは、一九五六年九 始めて発見されたのだ! メキシコ州の一天文学者によってその赤色 空間に現われた一個の正体不明の物体であ くもない灰色であって、自然界の 角度約五分 衛星そ ボスと ح

であ れ は る 以上の 異常 空間 き甲 る。 カシ. P す な あ な の K 5 れ は わ Ø 力 \mathcal{O} ゆる ち も な 地 自然 何 球 し 办 な れわれを取り巻いているからである。(ナシ いなる時代である。地球人の夢想もしない神 界の物でない は火星 周囲の空間及び太陽系の内惑星を取り巻く い。 それともこの銀河系の別な星々から来る はわれわれを一つの結論に導くように 説明はどのようにつくにしても、 から来る知的生物のあやつる航空機 六四年三月八日付。科学部長バ "何か"が存在するという結論 思わ 今日

크 メ キシ ュ の U F O 事 件化 つ いて

た惑星 私の シュ大学流星研 六月号に する連続物を放送 ととの 様を放送し ろが第七 「私 間 の 航空機 は二人 面 サ 目 コ 事件 一(地 或る新 ン 間 K をジ V٦ る気 『が機体 ジ 横た メ チ 5 (球) I だ K Ø + ッ シ 配 つ わ つい ル その と見つ 人間 ヌ 聞 揭 究 スでは コ さを示 よりも たと עונ はな って 0 は 載 州 近 て新 した 所 を見ま 中で、 は 警官 V めま カュ < ソ Ų٦ = ろこ K コ 聞 別 る で空間 か、 テ Ŋ つ たが、 K 7 な ン 関する 1 のを見 し し 4)* ザ 1 その 報導 世界 とに たが、 ピ 力 口 た モラ モ メ Ø る 丰 K ラ 0 ン 世論 漕 され な 現在ま 浮 は、 第 K シ コ た テ Ø 日 は次のよう 陸 $\dot{\nu}$ 七 住 そ V ラ 2 カン では 事 と報導 作業衣 て で直接 な Ø て 白 يع ₽ W チ 件 ス 内 カュ 0) でい W V で米空軍 V る。 博 た」と書 作 つ の 又 (訳注。 んに述べ あれ 一人 業衣 た情報 な る 士は い
う。 K らしき物を着た ル ュ し ザ Į żţ た新聞も ころが は米国 数 しと言 間 は ズ 毛 らしき物を着た二 は ' 本誌 機内 では 日間 この を伝え が ٧١ たと言って ラと会見し ソ てい コ 今年五 ある。 = 苦悩 Ø 地球 U 9 へ入る前 1 超 た。 ᆂ て る F = 口 極 0 人 K 事 ュ 1 る。 来 月 満 秘 いる た模 の姿 件 た K とこ ح 関 7 0 K を

ところで新聞 型円盤 ら約 間 開社 + 前 に報告 の着陸 0 社の \bigcup F の 知らない新事実が明 L 0 事件が発生した。 地点で、 た 騒ぎの最中に、 のである。 二機またはそ 詳細 ァ ح る ナ の地 は 判 みに 明 区 n 1 出 次 Ø 以 厶 た。 Ŀ 住 第 Ø 民 K \varnothing C 掲 数 そ 名が れ 載 ア A 0) ダ 予 耆 ح ハ 定。 の スキ =

ところ

で話

は

年

釣りの好きな氏

は

図中矢印の海岸へ夜釣りに出かけたのである。

にさかのぼる。十月五日夕刻五時頃か

0

U F

Q

て

リス

ŀ

にあ

げて

いると

件と同 こと はよ の 数 K が そ ある 増 加 Ø 地 Ø だ 区 という事実である。 へ見知らぬよそ者が入り込んで来て、急に A ハニー発行の機関誌六四年八月 事実は小説よりも奇なる 居

土永夫美夫 氏の不思議な体験

り

円盤と ゆる 円 き一緒 と冷静 に行 るの よう る フ の報告を折 て 乜 U さてこの土永氏 髙 思 Ø の K な を目撃され P Ш 想団 た行 な 断 潔 敏腕 な観 2 0 U 0 印 市 つきるだ てきた氏 0 つ 士であ 体を遍 刷 活 察 を振 東 K た な 眼 わ K 動 泂 来 つ け る れ て 目 ع う 4 ょ は る 用 搫 は K 标 け て \varnothing 町 Ļ 二の三八に在住される土永氏は編者の親友で、 数年前から自宅上空にしばしば円盤が出現す する亜鉛板の製造工場を経営され、実業家と より毎回観測するうちに、このような度重な なく感心するような氏ではない。 ことであるから、いい加減な物体を見誤って うになった。もちろん多年円盤研究を専門的 で解釈のしようがなかった。 編者のもとへよこしておられたが、ただ奇妙 るので、 は氏ばかりでなく家人や近隣の人々もときど 何か特別な意義があるのではないかと感じる と先ず紹介しておこう。 一方、 ては久しく苦楽を共にした間柄 現在はアダムスキ 常に高い水道精神を内に秘めて、あら 証人はそろっている。そうした体験 Ţ の哲学に傾倒され 豊富な知識 である。

自分は 応え 見知 カ た。 って て帰 び方も 電燈 を感 が見 にな だに ラ から K 準語で で Ø すよ 上か 釣 ン 出 方 問 であ じて 当ら る を指 った氏 数秒 IJ わ て が好きでこ 2 向 を応 て あり、 か 知らない F て来た。 その は らやや南 W を眼 5 な Ø は 間 0 \varnothing V たあ 竿を引き上 引 し向 0 た 母 雲 か な 男 とい が カゝ が れ 後数 ₽ き返 よう 前 氏 な な け ٠, が飛 水 た の た Ð 機飛 は カュ の K ろ氏 まも てく 面 りの早さで て 如 と言う。 のあ 寄り たかと言う。 分間 げ り の K 見 き物 な やが を見 を思 は 柔らか び K 力」 わき起 7 たそ 一げたが な Š 移 来 を東南 なく、 たり 九 行 経 Ø 5 と見 す小 円盤 て が 声に た つ つめ し V ベ 9 Þ そうこうするうちに 办艺 て、 浮 出 へよく 0) 暗 カュ 7 つ な、 ح た て 上 さな と考え 来 n で針 飛 • て く 釣友 カュ をく 南方面 ふと空を見上げると母 一ごゆ 9 見な げ なっ ん どきを釣糸を 機 針は て氏 そ び いると、 ところ 人なつ てきた。 入江 同行 でい ると、 来る を付 0 は が れ 上空 な M 位 て 取 カ ただ 鷩 再 へ数 9 の 置 る 声 カュ が が、 V け 5 が び出 2 突端 た友人 6 突然暗 双子 5 の 分間 を へ急速に消 Ø 男が ていると、 n て空を振 たと答えて (1) 男 り け \$ 遠 し から まだ針の カ て で、 現 い話 垂れ であ 4 ば 目 島 く け V 0 去 派 の K カン 友人 た。 南 が Ø 5 た。 闇 言葉 行 しぶり 害 2 らや 方 な 取 茶 9 9 今 \emptyset ŋ て 9 て 相手の ここで を東 店 仰 度 船型 するとそ 力3 中を背後 え り が 办 付 去 አን は K 5 て 5 去 K \aleph は ラ 立 て 聞 ら土永氏 つ け方も糸 強 北 行 9 て ン の きな だ た 9 プを 男は 釣 東 た 方 雲 ķ١ つ が 7 9 Ø た 竿 手 0 ま ^

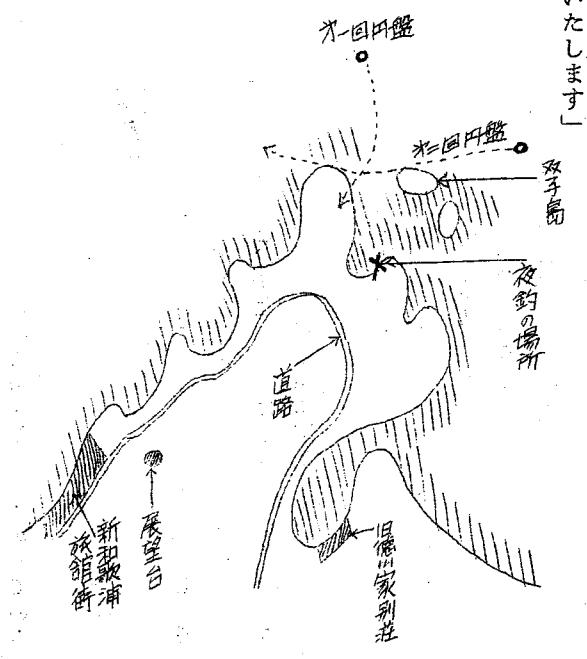
> な て て る で たこ な な 郭 直 前 ま を の Ų٦ جَ どの と来 と は る 9 話 て 者な そ それ カュ きり 中 な Ø K 円 う は 針の付け方やテグスの結び方を知らぬはず うな絶壁下の危険な場所である。(3)男 た母船型の雲の如き物がかなり長時間滞空し 盤が出現したこと。 二十数才に見える年輩で、しかも一人で夜釣 つけられるような印象を受けたこと。 に針の付け方も糸の結び方も知らないこと。 は、 なってい 特に夜釣の場合は、よほどのヴェテラ つしか見えなくなった。 49なぎの西空にきわ の現わ (2)た

う。 たの ます K 四 は、 右の 包 以上の 考え ま その あ で 盤の 以来 は しよう 件 あ れ り 西 ᅪ 五 出現が ざる 日以 分間 るが、 てしま ような次 は 七星 南 ځ れ ۲ 相当な内 西方 n る 来円 を得 た体験 K の が 再開 V そ 中央 面 わ 0 な た ろ カュ 後これに ら真北への飛 二十五日、二十八日、 って自宅裏西南の方向より真北に一機飛来、 されるようになった。 くなったが、今年七月二十一日から俄然夜空 の出現がバ 容のものであったと思われる。更に奇妙なの をやたらに神秘視するような氏では 徹庭的な である。ここにおいて土永氏は大い 付近から真東、またはやや南に大きくカ 次に、 ときに停止または急上昇、消滅といった現 類似 推理のもとに或る一つの結論 九月六日付の氏からの書簡の一部を ッタリとまってしまい、 した事件は発生していないとい 来が主であったが、 三十日と連続 同日午後八時四十八分 最近 氏はます ないから、 なる疑惑 の出現で に達し は ほと Į

「円盤の来訪は相変わらずでして、雲のない場合はほとんど毎

また近所 住む私 観測 続け 私の 途に の中 差す ました。 左方よりに の つき、 化私 K 宅 学三年太田君と共に市 て、 から 办 お ٧v た な ておられます。 たし、 出 口宝四 りま 父さん の を訪 向を見 工衛星 次 G 末弟も私 Ø, K た た 以来円盤来訪 は 消え ٧١ \$ 住 ち ま れ 御様 AP誌友片平君御兄弟 一機、 \$ カン 途中片平君を訪ね、 とても も実際 す。 族の て が、 ŧ む小谷民代と ら出 た頃 刄 郎氏御夫 ますと、 八時三十分頃、 は 雜談中 子など承 ン ば それ 一機 者は の 直線に ゆっ 私 の宅で始めての できな らく て参 帰宅すべく た。 切 K 特に不思議な Ø 派来 れ目 すす られ、 飛行 もちろ 日誌 妻もその中 は 北斗七星よ くり東方へ、 この間約 (数秒) 人工衛星だろうと言われ りま し を縫 盤 め いう御婦人もその Ø の北区を西に が か飛行せず、 作ら 状態 でほ ሌ したが、 Ø 六十谷大橋 外 「円盤 約五 話などを)、 円盤 停 五. へ出たト 近所 も私が を見 れ の二人ですが、 とん て飛 止後、 ح 現方向 経験だとしきりに 分以上と覚 りやや東 この لح 分間近く です!」と言う の話をい 私と変 چ ح 話に ど面 は 0) たことが 人たち 間約 流 訪 停止ま 々上 今度 夕 八 白半分に ン、 夢 n 11 時 10 私 で北 わ た夜始 から 月 一機ゆ る紀 十八 は 中 た 観測 当の + 人でし から K な 5 東南 K し た **1**/C て りま 分程度 も ŧ フ 或 斗七星よりや Ø 九 は な ХQ ķ٦ 某団 知ら 感心 うく る と 日の め ます。 ŀ Ø 片平 Ŋ な した 川の土堤上 ほ 南 て 力 席をは 别 W で、 て、 か ملح て目撃さ た Ð K 1 してお 観測 の用 ろ方 折、 夜、 の な 大きく ŋ 君 十時 ヴ ま て 東 観 大阪 を切 か 定 の 共 件 入 重 同 近 合点 片 後帰 粼 測 から 方 沭 K 平 Þ て 家 を ŋ た K で 指 2 父 力

> は否 とに 南に 最初 方に に二機現わ とです。 現わ 定的 ズ 向 Ø ゆ サ カ n な当人 ン ۲ý れるこ は 中 なものです 至極 これ やが り東 略 力 た て とは あ は 方 て 最 ヴ 近 る 付 カュ っ が、 全く珍しい現象です。 近の雲にかくれました。 くり飛行、 なりの速度で東南方に飛行し去りました。 出現し、約三十秒ほどして更に一機やや南 片平君のお父さんの御発見でありましたこ まるで私どもの話を聞 消滅を見せてくれました。 では九月三日午後七時三十分頃自宅裏西南 御入用でしたら別記してお届けするこ 真南の方向に来て停止一分後東 円盤日誌も私なりの いて この夜の如く同時 V しかもこのとき た か のよ



人 V 質疑応答 イ K 恊 ズ* 友好団とも 力し て ķ٦ る と伝えら ٧٦ わ れていますが れ て Ų١ につ

G・アダムスキ

問 どう考え ヴ 宇宙 ン て ٧ĭ ますか。 る大白光教団 いて、 あなた

宇宙 のな 答 な か あ K れ 白 は は完全な虚説 光 だ 疑惑を起 の 黒だ であ のと こし て互 つ V う教団 て ķ١ KC ح ح 争 ん な 何 つ ば 7 Ø 関係 カュ ķ٦ る げ も 人々 た説を支持 持 9 もあります。 ては し V ませ た 人

問 れて ウ あ 灰 原 太陽円盤や、上空 た が 秘 会 密の つ た 宇宙人 遺 跡 K カン つ は、 5 で知 でな 過 去 い Ø つ と見 て Ξ ٧٦ <u>_</u> ます え な 大 か V 陸 南 の 米 遺 の 物 大 ح マ 考え ル 5 ガ

す。 例 Ó の ル 施設 黄金色に見える カ 金 ゥ ァ Ø の 太陽 **3**/ の遺跡は 部で 円盤は す。 Ø は、 今日見ら 办。 技術上、 つて宇宙 れ る 気象上の のと同 人 から 生 U 産 条件 種 Ø 類 た め K 0 よ 普 K 寄与 る 通 の 円 で

です たた あらゆる ラ が、 万物 宇宙 す る宗 人 から出て は はこ は自然界の万物 エ 第三の目 いる放射線を見るこ な表 ス の三つの機能をそなえ 、現です。 です。 を持 から が第三の 放 人間 J 射線 て Vì Ø ます 目 を出 논 オ て が できま とい - カュ ķ٦ ラ は るのです て う 彼 V Ø す 体 5 る の は カ は 0 磁 と同様 が テ 人 気 間 V 放 自分自 パ Ø 射 です **୬**⁄ オ 線 1

> を理 ほ 解 な ٧٧ にこれらの科学的な意義を知っている人

の Ø 音楽 カュ でくるのですが一。 地 球 の音楽に似ていますか。 私は 特に F ピ

とえ カゝ ま ば な U す 金 て 星 は を例 は る ŋ これ K 球の は あ で す。 楽器とその相互作用に関する知識がはるかにげると、そこの音楽は地球のそれとは異なっ 音楽に似たのもあると言ってよ のもあれば、よくない。 のもあります。た いでしょう。

派込 以来、 ム 円 K つい 盤実見記 だれ フ ラ も彼 て 何 かをご を見た人はいないようですが一。 ン 高 グ 文社刊)。の著者であるセド 存知ですか。 ソーサーズ・ 一九五五年にスイスで消えて フロ 厶 マ リック・ ズ(邦訳 アリン **%**続空

答 は な たこ た ウ いこと 知 りま です ア が IJ ある カミ せん が ン ン 判 ガ その 明 の直前に消えてしまいました。(訳注。セドリ彼は私を訪ねるために米国へ来ることになって は ス たという) ターク女史が調査した結果、そのような事実 イ スの或る療養所で死亡したという説が流 スイス、 バーゼルのGAPリーダー

利用 宇宙 Ø な 太 い ٧v 陽 K は る て 核 "程度 ます。 建設 す は る人間のことを聞きますが、これは地球人を 超現実的な社会がありますか。われわれ 的な応用法を見い出しています。 ルギーを何 しかし地球人とは違って、破壊的な目的 ۱۲ ۱ 宇宙人ですか。 かに利用していますか。 はと

たも ま かく が空 世 われ 間 の この太 です。 K 消滅 わ れ 八陽系に それ する例 が知っ 以 外の て は Ø そ ٧٦ ほ る宇宙人はそのような事件とは 消 とん λ_{i} 滅 な 超現 事件に どは、 実的な その つい ては 社会はありま 人間 よく Ø 自由意志に 知 りま せん せん 関

我であろうと考え すなわち われ われ 創造 は 主 至上な てい の ますが、 る英知 概 念に 固執するの ح V なぜ宇宙 うも Ø 人は を、 で すか 人格化 多次 元 が の普 れ 遍的 た な 神 自

には、 ユニヴァ という表現を用 われわれ は 1 人格 スに は 人格化 は限界 が 化 为 創造主" れたも Ų٦ たもの 7 が いま ある Ø とい 事。 ですが だが けれども ろところ コズモスに 創 造主 はそうでは を宇宙人は はそ はそう ない。 n ″宇宙の が て ない は 実 な 際 英 V

でしょう。 てくるし、 出生地 いて 地球 の戸籍をどのようにしてごまか などを調 本人 のあ たとえば W ているとす の出 いだに混 身地 あ 查 され な U た れ 办 追求され って住 が交 ば、 ることになる 通事故 課税 ん して とい る で V K ょ うな問 う 問題 いるの る宇宙 は あ ずで ったとすれば、 が早晩必 す。 です 題も多く発生する 人 は、 力。 滞 0 で起こ 彼 在 当然 5 し から て 住 地 9 V

しょう。 各国 て カン 9 そ に常時 人は て うっで 期 な い"と 間 るのです 体的 ない ろ ま 2 場合に して で K か。 地 切 Ų١ り抜け 球 ₽, る宇宙人 は、 人に 結局ご しそうだとすれば た ること 彼ら は、自分 W は自分 ま L から て彼 カゝ できる し で所 通す Ø 50 正体が 地球 ことは 存在 Ø 持 で して 人に証 を知 す。 周 \ } 囲 できない る の人 9 拠を得 て も か 類 て 6 6

> 万の の 宇宙 人間 は 뫮 五大強 りに ょ を うに 殺す が 力 は 国 なり か Ø のは 政府に ませんか。 し ないことを読 な 誤りではあ たいして強制的に道理をわきまえさせ いような地球の危険な科学実験を考え りません んで知っていますが、数百 かった しか K ゎ れ わ

上に いと ろか 報 ソ ķ 連で原 は、 う る 結 ことを示 子砲 周 中 円盤 その 仲 し ています。教育とか知識とかいうも 品を作っている工場を円盤 間 いえども地球人 を正しい方向に行 が作る物と本質的には大差な かせない が破 のでは 壞 した のは、 な 논 でし

国々 には 答 もた てい けで を忘れて ですが、 はできな は充 る の す。 限 証 らすような状勢 度 拠 分な証 力。 が 仕方 です 自 は ح あ 国の な っ は があ た。 りま ります 多数 拠 体 を り 何 ません ですか ん。 0 持っています。それをただ秘密にしているだ の進展を待つ必要があるのです。 然できはしない 情報を流 人が欲しがっている証拠のすべてを入手し し大衆は政府の秘密政策を変更させ 弱小国は沈黙させられる ? 宇宙 し得る国は強国に限るということ 1 人がわれわ だからわれわれは真相を n のです。 $V\subset$ な つらいこと 得 強大な ること る物

時 東 側 と B 場所 り得 や西 間 側 る 幻 K ょ 杉 の が 宇宙 ろに ける る 警告な 的意識 所)の 種の工場や武器を円盤が破壊するのは、 するためにそうするのです。 のです。警告の目的について疑念 ため に到達しないで、次のクラス (訳 の準備ができないまま に死 Œ 0

本人

一定の

法則に従って異なる形で生まれかわることに

す カゝ そ れとも 生ま n か わ る 場所 は 全く Ø 偶然 で決ま る

るか 他 はだ ۴ で行 V の惑星上かも 結果 れ ス な を清 にもわ b なわ の (因果) "です る n は 、ます。 のだと 力立 何もありません しれませ りません。 Ň (訳注。 っ てよ ん。 ね。 との 性別、 しかし 来世 ţ٦ 0 地 各生涯が来世を作るので でし 球 办。 どん 上かも ょう。 体格等が 生ま な生涯で、 れ しれ 異なる かわりは常に ま 놘 どこであ の 7 Ų 異 یج 1

星か 違があると言っています。 の人間であって、 注釈で、 真実であ もよく似 ら来 これま の 1 の た人だ です あなたは、 るとすれ Æ トもあると ていると結論づけてよい はどろで で にあな けでした。 地 ば 球人と全く同様だけれども、 他の諸 た しょう? いう宇宙 0 また 書物 惑星 との三つの惑星の人だけ フラ に現わ 人 K ン はどこから来 巨人ですか、 サ 住む でしょうか。またこれ以外 力 ル ŀ れた惑星 スカ ン 生物 巨人, IJ 小人で 人 るのですか とい 0 は は 身長に 書物 金星、 わ ろの れ す が地球人 か。 K. わ 火星、 れ はどこか それが 冗 する 0 諸 差 土

地球 から来た代 の理由 へ来る惑 表者たちと会 があります。 星 人が主と しか して ったことがあります。 金星人 し かつ を火 て私は或る 星人 で 機会に ある ح 七 いう つ Ø Ø

に住 にも述 步 人間も で三フ か ように、この 概 ます。 1 て同じ] } 三十つ 少 々、 太陽系 ょ うなもの 最大の巨人で十つ 1 ば カゝ ጉ です。 ŋ と でなく ķ٦ う この 0) के か 本当か 太陽 ょ 4 そ 1 系 ŀ 如 では ゥ K 及ぶ な ソ る

> はわ へを恐れ カ*. る た で A. がま き散らし た話 ン巨人とい の拡大したものです。 うの は 宇宙 服 を 耆 た字

問ーテレパシーの能力を開発するのに何か特殊なよい方法があり

手では ませ 写真 入らな ようにと思 むように 中化 3 K から ん あ 出 から ŋ さめるほ Ī 暗 簡単な で、 て来ま 念し 光 始め す。 して下 い室 線を ます す。 どん の中 は する 3 描くこと位から始めて、 っと時間をかけてもよい のです。これにはわずか一秒間しか 心中に鮮明な光景を描いたとたん、それ 物品を思 小さく切って、それを一枚ずつ両掌 へ入って、 そしてあとからそれを現像しますと物品 面 白 V い浮かべながらそれが そこで未感光の写真用印画 方法 をお伝えしま 次第 でしょう。また最 K L 印画紙 複雑 ょ う。 のあ な物 必要 に写る 紙を が 印

です 問 は有力な 贈り物が 物を家に か 今日 交換 持 遠 拠 れ 2 され でも て 帰 K ŋ 0 ます。 行する なると思いますが 惑星からもたらされた書物、 というような話をなぜわれわれは聞かな コンタクティーと宇宙人と 場合 $V\subset$ は少なくとも ちょ 紙そ つ のあ の他 とし いだに た土産 Ø

との に疑 させる は 空飛 あ とは ŋ わ る。円 ます 何 が のと が はない それ ょう。 証拠にならないというのなら、 とですか? 何 を持 って来て見せればよい 証拠 これまで のですから、 物件にするためでは われわれが連 K 少数 証拠物 の贈り物 絡し 件の正当性は文句 Ø です 個人的 て ありません が交換され V 力。 る 見地を 他 の

金星から将来した金属片を所有しています。 の純度 品物 を持 います つス か て ズです。 ? ます。 もっとよく その あな たはこん 金 考えてごらんなさい 星と土星 な物が か 証拠品 らも れ は たらされ として 百 パ

ろエ 円 は 間 Ø 知的生物 をどの ょ うた K よっ 解釈 て操縦され すべ きで てい るとい ろ カゝ

は フ ラン ス の著名な 円 盤 研 究家

す。 ば 力。 ば され 結論 です。 7 いるととなえ そんな説 た は Ø 数年前に と同じ 円 ほど病 盤 は 的 マ な ナ

新生児 が生ま れる場合、 ţ, り 頃霊 魂 水 そ n KC 宿 る 0) です

妊

娠

た瞬間です。

た言葉 経過する Ø ります あなたは 0 すか 後 カコ カュ ら次 今日私と共に また十字架上 つまり瞬 の生まれ 楽園 カゝ に生ま 7 わ VC り ま エ で れ る ス K だ が カユ ろうし تخ 犯罪 わ 九 ることを意味 は 0 一人に 右の Ø 葉と 言

そうです。 力。 し後世 の 1 エス Z が罪人 はその MC. 意 味 言 を理解できな た の は生まれ いままにすごしま かわ りのこ と

です

人間 0 娠 死後 た瞬間 魂 が まで 肉体 は を離 わ 10 4 て 力。 か 数秒 5 次 L か経過 0 れ しませ カン ŋ

運するだろうが、 付記 > 右 の最 参考まで Ø 回答に K 本誌誌 义 友 T て は読者 氏 K (東京) ょ 9 て 意見が の見解を

は できず、 人体 にある受胎 て転 カュ 急速に 以前 空間を流れる 霊は静電 から 尼引 ょう - 正 カン 引力で強く再生すべき体(大抵は れ はずで、 と思 て 0 ろのろと空中をさまようこと て 最も速いときには光のよ た論理です。 婦人田田

死者 妊娠した婦人 \mathbb{B} A 陽電体(十)

(男女の別なく) この共鳴空間の中を静電束が通っていて、 AとBとの間に張った不可視の力場があり、 A がその肉体と縁を切るや,このゴムのよう うな力場の縮む力一つまりマクスウェルの 歪みによって、Aは急速にBに向かい、B と合する。

空間 ろ 帯電 の結果 K と考え 電気抵抗 を生 ス れます。 生物的 がどの むでしょうが、 ように に受胎された体 分 まず普通に する か (帯電球 で共振 は、 吸引 川卵子) 死者の体か の 作用 K 直行 ら解 が

電異常か カゝ たま K カュ 以外の 時そ このような吸着を受けるようなときは大抵は のよ 何 カュ うな個体に \emptyset 個 体 (鉱物、 吸着され得ることもある 植物 動物を含

悪作用 あろうと思 実現さ り 引力 吸引 受ける 世 る必 办艺 を起こし、 作用する ます。 る K 要が 吸着さ 人に悪く 究者た は というようなものもあると思 よう Ø 低 ある へ生まれ 彼 迷 於 らの 作用 のず と思 い精 ち に生きて 自縛 振 すると 動 か 神 カュ ょ ます。 うな わる 6 波 性 動 + ٧٦ 動 て の 高 が岩や るあ V 1/ たた の 振動 は う 宇宙 る 電 た り ス その め、 人と 建物 の持 だに が案 から 来 た 主に るの 会う まま 外 それ 心を ような所 0) ます 多いように 向 を待 な Ø Ď, 上さ 触 と つことで 彼らと 共

らけさせ

態度

は正直

なところむつ

7

しまう

右翼

か左

ァ

ムス

牛

1

· の言

うよ

ろに

気を楽

K

て

力×

などとい

う

杉

カュ

な考え

n

やせ

になりや

すい

のです。

ブ

ク

悪

(善なる人

うよ

うな妙な分

をする例

ため

は

どう

て

気

を

K

て

カュ

は

けじ

が

ります。

事を見る

必要が

あると思

ます

は

気がだれ

る

7

W

振動

が低

な

り、

考え

から

お

か

てしまいます。

宝ク

ジ

でもあた

つ

て

四百万位

できな

なあ

ば宇宙

研究所

でも作

7

て円

Ø

だ

け

でも

塩谷博士とルウ・ツィンスシュターク女史

--- 推せん図書 ----

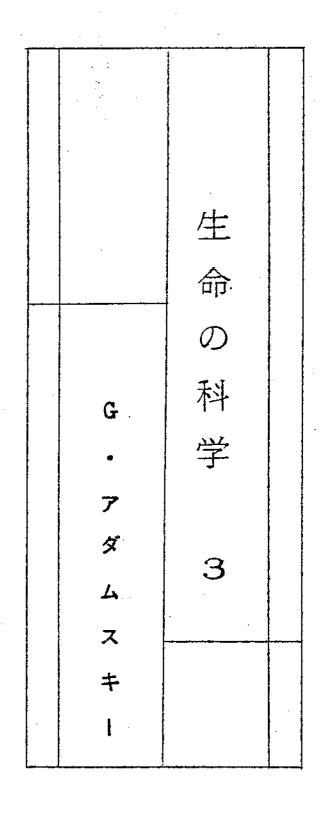
◎「生物学的無線通信」B. B. カジンスキー著・西本昭治訳 ¥260 新書版東京都大田区上池上町264、学習研究社発行。振替 東京142930

著者は1919年の或る夏の夜、友の死を告げる "銀のふれ合う音" を聞いて以来、1962年に没するまでの43年間テレバシー研究に打ち込んだソ連の科学者。副題が「ソビエト科学者のテレパシー研究」となっているのでもわかるようにテレバシーを徹頭徹尾科学的に解明しようとした好著。

◎「世界林業行脚」塩谷 勉著 ¥ 4 5 0 B 6 版 東京都千代田区六番町 7 番地

日本林業技術協会発行。 振替 東京60448 著者は九大農学部教授。農学博士。林政学の権威であるが、超心理学や円盤のすぐれた研究家でもある。 本書は昭和三十六年の八月から数ヵ月間ヨーロッパ各国へ出張された折の報告であるが、題名から受ける堅苦しさはなく、軽妙な筆致で描かれた楽しい旅行記。特にスイス、バーゼルの円盤研究家でスイスGAPリーダーのルウ・ツィンスシュターク女史やオーストリアGAPリーダー、ドラ・バウアー女史らとの会見のくだりは興味深い。著者は本誌誌友。





第五課 意識、英知、及び生命力

そし ありま す。なぜなら今日われわれは、 精神的に気 い物との 親を頼りにするのと同様 は自分の生まれた家族を頼りに、その家族のありませんか。そして空間こそ万物の出生地 はならない わ て不可視の空間をのぞきたが て以前 れわ 両 れは実際に にも述べ づい 方に同時に気 でし ているからです。 ょう? たように、 は 目に見え づく に、その創造主を頼りに 万物は ように 接触 な わ つ ķ れ その家族の中で生きてい ています。 ちょうど子供が指 生命 わ 自分を カュ し れ て し万物は最低の物 Ø は目に見える物と見えな いる目に見え 海 訓 練する必要があ Ø であるため なぜそうなら 中に住んで している 導 る物に を求 K カン ら飛躍 います。 なくて る 0 め のみ りま て母 わ 万物 は

ら異なるところのない他の結果(現象)によって導かれながら、しかるに人間は自分の好みのままに生き、しかも自分自身と何

させています。知覚力の最低の状態の表現にすぎない地上の生命体に自分を密

によっ ません は人間 た水と ません。 知であり力であるか 知ることはできます。 の視覚 海 中の て人 で見ることは ٧١ が分類してい この不可視の状態にお また善や悪 動物 う液体は (間が分) で Ž. 類 えも・ るような光輝や暗黒という振動を知ってはいらです。それは万物を生かしています。意識 をも知っては できません。しかしそれは意識を通じて心がの状態において生命の要素なるものは、人間目に見えない水素と酸素がなければ存在し得 したものにすぎないからです。 というのは、意識は形ある物とは別個な英 水の上の光を見ようとするのが いません。 善悪とは法則の誤用 います。

向ける ぜなら意識の外側 からです。 人間に Ø は せよ何に したが 人間の義 4 っ K 務 あて)*:-。 て万物の両親である意識なる師に人間が心を よ意識を離れて生きることはできません いればそれは完全な無となることを意味する なのです。

ように どの とができます。 は多 てみ さて、 ス Ó ら水面に至るあ マ なり、 くの生きも て意識 生命体がい ることに 小な生命体を 心を、 ۴ 食物を 的に が見 わ 意識 しま 気 る Ø る れ 見るようにしなければなりません。そして 求めて海中深くあさり歩いている一粒の砂ほから放たれる印象を通じて意識的に知覚する ことを知っています。そこでわれわれ づくようになる必要があります。今やわ ことのできない、 われは広大な海面を眺め渡すとき、その しょう。これについては海岸を例 的 V だに同じことをやっている無数の生命体を な行為の観察者たる意識との関係 海中深く起こってい にあげるこ 0 る活動 は 中化 'n 놘

知覚しなければなりません。

吸うこともで の世界で 二つの 離れ す る ともできる 異なる世界の体験を持 κ きる う も F. Ø ウ ます 才 からです。 は 深海 Ø ような 地球 K も 力 を包ん ぐる Ý またそ ω ラ ₽ つわ ۲ は 0 で ع けです。 ま ガ も 中 Ų١ る空間 スの す。 できれ の 水 ころし 海 液体 Ø Þ \emptyset 体験 不可 Ø ま て 世 ح た 界とガ 水 め 制 面 扩 て 上 ス 海 を た ス

界があ の空に するの るよ い魚と同様に生きること 間も、 うに して生きることはできません。 向 る ん から ば わ カュ はな 万 れ 2 办 同 (訳注。 物 わ です。 て ね わ は れが大気 四 ば K ニつ 生きること れ 次 なり 人間 この場合、 わ 元 れ 0 ま Ø 異な は土地 と呼んでい 中 はできませ が 珔 ん 空間と呼 で生きて る体験 ができません。 空気の満ちた空間 人間 が な る空気 け \mathcal{X}_{\circ} λ_0 は三次 地上の生きもの W 下 れ る で で生きて 形ある ば水 V カュ である らで る 元 不可 地球 なく 0 物 重。 地 V 視 を四次元 でさえも カュ は して生きられ 球 る 四次元 5 が生きて呼 0 地 です。 四次 て と 殼 カン 住 を とい 存在 Ø 元 知 ん 支持 そ \mathcal{D} て れ 吸 方 で な 世 す

間 の苦悩 因 は結 世界 んで Ø 結果 な 果 は の世 います。 り と自分の 四次元世界で始ま よ である三次元世 < 界に 理解 多 そして四次 住 < Ų て の時 で ます。 ります 界 間を与えて る世界とを 元を理解 で働 し ۷٦ か て 肉 て、 体 る ようとして び 間 か の けよう それ は自己 らです。 心 を (結果 の て れ の 0

> た。 カュ も だ三 ŋ な つ 理解 次 て 元 ま て す。古代人でさえも四次元を理解しませんでし 元世界があまりに大きく相違するため いたなら天と地、 で教えられたように四次元世界を理解するのは ながら混 乱しています。そして原因であ 原因と結果というふうに分類 べ ると

実を望もうとして自分を訓練してきました。 時間 体験 す。 の て Ø を表明 始まり以来、人間は 連点を見ることができただけです。そして本人がその神 ま った ようとすると大抵はだれも相手にしないのが のです。わずかにあちこちで個人的にあらゆる 自分と同じような三次 四次元を神秘的な伝 元の具体

まっ も彼 を知 ろうとい た 9 を理 エ の教えは理解 て Ø ス です。 解 力。 う望みのもとに四次元は生命の抽象的な側に置かれ は らその動機を理解できるのです。 できる機会はないでしょう。人間は次にとるべき段階 力斗 つ て しかし人間は今それを理解しなければこれから先 3 四次元を説 れていません。その結果、 明しようとしまし たが、 今後理解されるだ 今日でさえ てし

人も持つことを望み得ないからです。れわれの宇宙の兄弟(他の惑星の人々)が有している知識を地球解力。ほどに大きなものではありません。理解力がなければ、わ時間という財産は、未来が安定する前に持たねばならない。理

間がずっと支配されてきたもろもろの神秘を捨ててしまおうとす識を周囲の四次元の不可視な世界と結びつける時です。 ただし 人人間は三次元世界について多くを学んできました。 今はその知

て謙虚 四次元 関係を意識に説明させること です。 K な であるので意識 6 **Ø** 반 こと ることに は、 ょ 結果である心 のみがこれをなし得るのです。 って 達成さ になります。意識は限界を知ら を原因である意 れるのであり、 とう 識 K た し て両 V٦

的知覚に 三次元 し四次元 せん 摩擦 の状態 の結果 よる 。その K 杉 の です。 伝 の世界は表現 ける意識 K よっ 達 の 方法 て生み出 はわ は 印 れ のより粗雑な部分であって、 象と わ される音響のようなも れ いう が 知 っているような音響を生 か たちで与えられ Ø です。 る感覚 ۲ れ は

です。 は、 それゆえ現在人間の 喜ん は生命を可能 で意識 カュ 中で分 ら教わらねばなりません。 ならし 割 める、 3 れ て 万物 Ųэ る Ø ものを結合する 魂であるとい 忘 れてならない ろこと た め K

て意識 しま うことに しょ を考えて -) と と う。 明 します。 う 確 先ず、 K メ みることに 理解 ッ そして以前 七 さの する ン ジ 不可視 た t しまし め 1 に述べ K が ょう。 の状態 心 海岸の K 洩 たように、 そし の中 らす 例 て空間 K よう でや 何 それ カ KC. J が 仕 た 0) ょ 向 諸 存在する は 物 ろに 地 け 殻で 質 る KC 地 球 とい 始ま つ 0

次元世 のは τ 科学者 ガ います。 とに てと 界が生きる ス類を構 は、 の講 します。 宇宙空間 ガ 成する 座中 スという言葉はさほど意味 た われ め でたびたび引用 に必 成分です。 K われ 向 要とする 力。 が つ 晴 て進行する なぜならこれ n 食物 た青空を見 してきた が をな 各種 存 在す 次のよう しま 5 Ø つめるとき何も見 る の ガ 世 成 ス カン 分 ん。 K な現象をあ らです。 Ø つ 重要な 中に三 V. て 知

> 質を有 えま して の惑星 ラル わ 述べたように、 態と た物 再び返っ ありま ものです。 を含 に違 して存在し ちのあらゆる元 ま 世 K W Ð す て W が が て来た でい か な る 或 る てい K 宇宙 の す C 0 んでいる物質の構成成分は固体を生じ得る物いるミネラルでできています。このことは、件下ではその空間に電光が生じます。それほ してみるとそれらは地上で知られている類例があります。 多数のイン石が地上にを示しています。 これだけが唯一の証拠 空間は惑星や万物を生み出すフ卵器のような 素は、元のかたちが宇宙空間で精化された状 す。このことは、地上で知られ ではありません。イン石というも してみるとそれらは地上で知られて たことを証明することにもなります。前 いますから、 の イ ン石なるものは地球から発射されて 電光と同様に宇宙空間で作 て のは月 ķ٦ る粗 拠では 落下 らやれ他 ミネ にも 雑な

がさまざま ٧v Ø 球上に ろよ 元素 い 証 ある万物 Ø, カュ 拠にな 5 発達 生ま Ø: れたとするならば、このことはを地球が自ら生み出したとし、 ります。 ります。程度にある生命体を抱えて活気を呈して 地球 あらゆる惑星 は宇宙 いる

事柄 ら教 意識 て心 確立され を知 とえ ち の で来る 疑念 方に る る て 各惑星間 耳 を起こ の う Vì を傾 の K な げ K け とは しても、このことは各惑星上で発生して は莫大な距離があって、 るでしょうし、光景を伴うのもあるでしょう。 て け るよう訓 ħ ば なりません。しかしこれ なりません。与えられる印象にた けないのです。印象のなか 練し、意識といろメ そ 0 ッセ あ をなすには心 いだに連絡 ン には想念 ジャ Ţ V٦ る が

まま行 に洩ら と思 たとき 識的 なか 前 ځ 能 K わ 9 間 れ な の で た て 7 ま 多く さえ る わ 1 Ø K 7 れ 障 デ カュ K は V う。 P アを 沿 た。 あ 0) らです。 た 7 私の ŋ 考え はありませ 物 K つ があ そし する必要が 交換 との ま て或る程 宇宙 る 世 また船 とき、 段階 て後 な。 2 た たか 旅 一度発達 になっ ん 行 の わ からです。 発達 あ らです。 て は れ 内や宇宙 した。 Œ 岸 ります。 わ とん て私 カゝ は れ て きわ 5 が 空間 ど価 心 の U ķ٦ 宇 或る場合 理 を応 カ な \otimes 宙 海 を眺 解力 l K 値 カュ K て 用し 私の は私 は限 Ø 重要です。 で め り 宇宙 K は た た な たの なら 私は 意織 界 確 の V ときと 証 心 も 旅 が 宇宙 され で ば Ø 行 あ 水 が それ 理解 とな なぜ りま は を 同 ح た 肉 様 と意 **Ø** を私 体 な れ す で つ K は で 考 た B が の め

惑星か 成する は 欲望に のであ 描 宇宙 か ろ \varnothing 間 ら来 適合 に あ え 訓 れ しく Ø Ø う る絵画 練 て ば カン ば κ 水 空想力 る印 させ ら来 は かり 多年を要したと りません。 容易 空想 そ 創 ح 造主に る Ø る印 れ の からでな 象を感受しな を高 は な問題で では石盤 ため 地 ようなも 球 象 印象を混 よる K と 趵 K つまり絵 ます。 誤用する傾 せよ 宇宙 < ので、 上に犬 地球 し は 乱 宇宙 他 て あ 0) V 空想 は法則 させ、 の住民 印 人 も Ø り をつ はこ ませ 象と 人間 惑星 Ø 向 は ¢. 0) カゝ れ があ そ K 0) は ん Ø は キ 画 そ n 置き誤りを表わ ŧ **₽** 地上に た あ ら来る印 が、 り努力す を る ょ Ø ン V K 絵を だに ヴ゜ から (印象 心は 私 = ≉ 存 Ø Ø 7 スまた です。 象、 る必要 絵 ゆ 在 あ は ようにそ を描 がめ を くま 差が しま は ま 個人 た があ が て 世 く は石盤上 あります。 て ち なと は ح ば 6 n です 的 りま 心 を 他 達 る が ば な な 0

> 誤用 あっ で す て、 あ が すること ね 出 の ば つ て です な て だ る K ぬ 0 です。 です。 って起こります。そこでこの源泉から不自然な れは個人の自我を満足させるために真の法則を そわれわれは宇宙人問題について多くの混乱を こそ人間が このことは 真理を知るためにきわめて注意深 現在多く行なわれて いる ので

ませ す。 れ 原 が わ こう は空白 存在す ん 面 澊 型 n 知 カュ 識 を融合させ は と同じ れ た乱 宇 \emptyset が る る 広 0) さ位 な 的 と た は V で 体 ます。理解力を持つ人には分裂や差別は存在し 分割を知らず、 からです。 う類似点はあります。

創造主の

『宇宙 のものです。しかし最低度から最高度に至る段 あるからです。相違といえば人体の洗 を持っていることを忘れてはなりません。 印象から自分を防ぐ の分析と法則の誤用の理解が 奉仕の分野において宇宙 全体との関連に には 他の 常に行 惑星 おいてあらゆる の意識によ Ø の計 練さ 人 なわれま 間 ₹ 画

印象 こ か I う。 でそ から て感受される が 啓示 ф ときとし れ と が 乱 V れ て う 示が)現われるという確信をあなたに与えるで ものが存在するという事実は、 ただちに理解されなければ、必要な 物事の内容は正しいとみてよいでしょう。その **空想また** は審きなどにふけらなければ、 適当なときにど Ø は忍耐力 蒽 識を

そ 自分 は そ な K 5 洩 つ ない 5 8 られるからです。ところが、 うにしなければなりません。 た事柄を世間に しゃ べろうというほどに心 心が育てて蓄積し 啓示が来るとき、





誤りに てきた の誤りをかき乱され と思うこと んできて て正しく行なうべき道が示されるからです。 誤りに 言葉を思い ð るん てい は 価 てい V ます。 だぞし よっ ます の を他 値が る かで、 出 な て覆われてはいけません。 IJ ためにその と仲間 いというわけではありません。 K す必 ッ たが クが Ð ることを好みません。 真実 要が せよ」心は長 っても 0 ときどき現 心化 真実を受け入 あ がもたらされても、 ります。 話し しと か わ Ų, の あい 他 れて けよ ような状態 れ だ虚 ようとし うとします。 しか 人 ただちに訂正すべきで 心心 力。 だが一つの誤 し前述 偽 心は 5 は こん Ø し やはり誤りに が ませ 物事 ても 起こ 誤りの上 なに したように これ ん の中 B るな ょ ŋ M は K は ょ 住 V

過失は 人と対立すること が電 とすれ 話線 ちせま が過 間 正する方法 とだえてしまっ 間 失をお 損失な 修理 深く分析 て感受されるべきはずの事柄 の故 を宇宙的印象 ば され 办 から K 話し手は送話 K ح 示され した な K ょ るまでは印 るな てごらんなさい は電 て、 って起こ 何をしたらよ かどうか カン らば、 5 るで 空隙 話 切 办 通話中 り離 は混乱 象を感受し るとし、 しょう。 し続けますが その K 7 Vi し、二点間 他 ٥. V K カュ で満たされ 誤り て確信 話し手が 切 が 人 も は にな n しその ゆ な わ る を がめられ カュ V \$ りなさ 聞き手は印 が Ø K て ります。 訂正 も b と同 真空または ることに しょ その故障に たと感 てな の方法 う。 い。 そ あらゆ です。 け そこで 象を受 n まい な 気 空隙 る りま ろ が ば る ま づ す

> た状態 が生じ の 正 K ため Z K 0 L 9 n あ であ た たこと な تلح 9 ても、自らをくり返すであろうからです。 かで、失われた言葉または印象が、たとえ別 もなお訂正はきわめて重要です。なぜなら、そ によってロスが生じるわけです。 そして一定の時間の経過後に神秘が生じるなら 失が他人に対立する場合、 は元のそれと同じではありません。そこで訂 決して解決されな しかしこうし な

りませ 要するからです。 ることです。 過度に用心 彼らは 彼らはそ の望 感覚 は る物を見失う 向 るあらゆ は た人々 空隙す 過失を避 て は む物 いる な 日 を私は 重要な 深く 九 とき なぜ 得る え を見 な て な け わ Ø ち人生のどこかで失われた物を満たしているよ すべてを学び取ろうという意欲を持っていて、 足して楽しく生きているように見えます。 い出す時機を知っています。なぜなら不安定な もありますが、知らないときもあります。 知っています。彼らは自分が何を求めているか 自分の現世 ならば、それを発見するのに数年、数世紀をも なら、人は言葉または交際によって自分に適 ると何事もできなくなります。これは価値があ ようとして過度に用心深くなってはいけません っていると思われる人々との関係を求めます。 はなるべく早く過失に気づいてそれを訂正す 彼らはあたたかく楽しい感じを持ち、行なっ しん でい のすべてともいうべき物 るからです。 彼らは未来に を探し求め 関心 し

数にいるのです。しかしこれが起こると一つ以上の裂け目が生じ、しかしこれを見い出した後も迷う人があります。こんな人は無

します。 絶えず文句は 決して ようとするからです。ころして したりします。 そしてい に表われ 友人を求めます。 知 は そし りま 多く ています。 てこれらの裂け目を埋め せん。 力× Ø てこうした心を持 り言い、 場合に怠惰 すぐ その証 きわ ベイ つも自分と同じよう 拠 であ めて は ライラし り、 心は 彼らが生活態度を誤 つ大衆は 貧弱なスポ ることが不可能 最も抵 生涯 た り、 真 に多く 抗 の幸福、 不平を起こし な性質の 1 Ø ツ の裂 な マ になり V 平和、 シ け目を 楽な道を求 っ 浮わ シ ッ て M ます。 ついた たり、 満足 作り出 プを示 ること め を

て本人 でし るは 大な財産を持ちながら、 知ることのな て こうした人 たちはうっそうと茂 す。 Vi ずの太陽 t 、ます。 本人 れるは Ø 有 う。 こ そして自分の理解できな にすぎな した後も切望し 人生の 、は身の んな状 ずの Ų٦ や天空の そこでは繁茂した樹木 価 人もあるでしょう。 保障の 值 光をさえぎる 態の は宇宙と一致 光景を隠 た幸福 なか 地 ために富と名誉とを求めたのですが、 本人 帯を脱 の内部はきわめて不幸だという人 で は 死 l してい して てし やって来ません。 いものを求め ん 個人的な意見 っ この世の中には必要以上の莫 が でしまって生命 た森 V ま ま な V 正し 林の ます せん ٧١ から 中で Ų٦ 方角 て生涯を探 0 です。 K 樹 道 本人 木は、 を示 の真の たとえてよ K 迷 したが 办 1 目的 道を示 7 "自我 た < 人 そ から を け れ K

は し求め (的意見 とん とのない テ ど知 いる とい 9 意識という光の て 物は実は う暗黒 ませ 自分の ٠ د の中では発見できな 中で発見されるからです。 なぜなら、 **半身* これは本人が全 なの いとい であっ ろこ て

> に従 こうして彼らは暗 は っ て出 再 そ B う び暗黒の を体 一つを見 光に従 ます。 は ます。 時存在 黒 んつ 地 っは ける の森林を作り続 帯へ引き返 それを見ることも理解もしません。 この人たちはそれま て出口を発見し、 のがますます困難 しか して 返して結局は迷ってしまうのです。し自分が何を発見したかに気づかなちはそれまで決して知らなかった永 いて、ときどき森林地 広 そのために 野 になります。 の自由を感じ 時 帯の ŻΣ ところが てそれを 経過する 暗黒を貫

我の します。 て 以上の かとい 意見" は恐 ってい な れ ٧٦ 或る夜メ ことで死 場所な 、るライ う例と という て大声で L ジの IJ ラ してあげました。 助けを求り K だ妻のメ ッ ー。このことは、宇宙の目的に反する。白がかを求めました。家から五百ヤードしか難りのジャングルの中で道に迷ったのです。はわずか半エイカーばかりの土地に高く生 (ずか半エイカ) 心間というもの した一 事件を私 が如 何 に迷い は 思 V 生 出 自

中で生きて 人に 類 むことが の九十 使 カュ なるで いると Ø から 元さとい って がれ は つ ていることがわかるでしょう。心がつながれてるならば、それは(意識は)人間が必要とするいうのは不幸なことです。この人たちが意識を1セントがこの種の「心というジャングル」の 私 字 て 7 歯の意識 はないにしても、彼らはいつかは完全に行宙の意識に従っているということです。たがここで言えることが一つあります。それ 生活を楽し £ 彼らは意識 むことができるからです。 の指導 彼らは K いつかは完全に 従って いる 気高 カュ らで たと

K 次の 第六課では 明 しま 若 Ż څ و V 肉 体を 保 つ た め K 新鮮され の 要性

第六課 "新鮮さ"すなわち人間の若返り薬

しました。 前課では心が意見というジャングル中で迷いやすい有様を説明

道を行 らわれ 傾向が るわ 服従 が人間 事を受け入 体 け して です。 わ あ かる は 心 日常起こす争 れ よりも、 ります。 る或る れ とは は現代 ねば しか 独立し しそ II 心 種 なりませ の生活に は の とんど抵抗 段階 れで V١ て 細胞群を持つことはご Ø ٧٦ 即応し も心 ん を必要とし、 原因です。 る一方、 は Ø 好 な ない道を行きたが み 他 い昔の伝統 Ø 心 方 如何 は習 で しかも未知 ば 一慣を守 存知 K 心 や因襲に悩ま カュ K カュ でし 関係 り怠 わ ります。 である進 らず時折 ょ
う。 して 惰に そ Z だ 步 な れ ح か Ø 物 K

われ 7 古臭 新鮮さは進歩であるば な わ 物 の人 い主義 います。 ません。 を探 Ø は 一層よき生活 感謝 Ż. は 右の から し のもとに生きることをいさぎよ それ 水 カ V なか クラス てよ めて も し 確実に 加 で、 しそ Vo 2 いるごく少数の の の方 カュ も でし たならば、 Ō りでなく若さでもあります。また今日 大衆を生き続 人々です。 し大衆を新 少数者 向 ょう。 へ大衆 から 大衆 激 をアジ 人々 大衆にもたらす新鮮 大衆はきわめ し い生活 はずっと昔絶滅 け V 勢 が B りな ۲ 世 Ų٦ しとせず、 で、 ~ τ Ø 向 世 ٧٦ がら引きずり ま K カュ て L す。 ゆ わ カュ 常 せる 7 も理 ること て \$ K 解 V ح り 何 た 続 力 **1/**C カュ

> 及ぼ すの 毎日 とが さが V 違 思想、 は って、 です 活動 Ø できます 社会に及 ように する 特 今日 に宇 想念以外の何物でもありません。ゆえに何かの II 何かの新 が、これは科学的発見の行なわれる今日、ほと は して 年令を取らない人が多数増加 宙的性質を帯びた思想は人間の肉体に影響を いる しい物が人目を引いているからです。 影響につい て多少の証拠 している 办 あります。 のを見

間は歩 たは す。 る原 とい 何者 はそ を行なおうとしても 人間 宇宙 そし 間 うの 型』を持 Ø Ø いた 他 とは が考える 也 0 的 て は り食べ 想念は であろ 想念で 印 ころし 動物 象と つ必 こと Ø た ろと、

創造する前 た 要があったのです。人間は思考する実体です。 ように形ある あるとい をしなければ生きておられないからです。人 想念は過去の りする前に考えねばなりません。それで、 てやって来ます。 ガイドとして一つの想念を持つ必要がありま 間の存在 う点を明ら のための 肉体を作るためには、その形成が 体験の蓄積、他人との交際、 に創造主は肉体の、想念によ 刺激的な力であるため、も かにしましょう。 間 また

う。 め す。 よう K さて、 うます。 とも彫 Ø ŧ 刻家と同じこ の表 n 怒りの念が ٧٦ 如 これは 情 何に異 刻 想念が起 家の を作 ょ る な 心 うなも からです。したがって若々しく健康な、よく です。それゆえ想念とは、それ 中 こると顔は楽しくなってくるなどの変化 心 る タイ む知的実体たるわれわれは、 に持っている一つの想念を粘土で形に表わ に入って来ると、顔付きは怒りを表現しま のなのです。想念が自らを表現するた プの想念が現われるかを観測 常にそうした が何を表 し ま が起

作るから 想念を持 った新鮮な です。 た ね 想念が ばなりません 肉 体 重要です。 が若さを保とうとす そ の 73 タン れ (型) に従っ K 宇宙 て 肉 的 体 な を

る影 い衣服 スや な想念を絶えず持 こさせ けて て五百才に か さとい 類は るに ス い気持 見えます。 響を及ぼすから いた習慣で は はわ るでしょう。 1 地 長 自分で考え のもろもろ ツなどはそれを着るた 和 を起 なる う見 く有用 球人 われ 支配 は四四 金 地 こすことはできません。そ われ ち続 に若 星 な て るとお です。 されて 生涯を 思 古臭い想念もこれと同じです。 わ の大師たち れは ける Þ 考し 才に が し 若 もな 上等な生地 なら ķ١ います。あなたは古 年令という見地でも Þ すご りの て 感じを起こさせます V しく見え、 びにあ れば ば肉体も若々しくなる 者 るからです。 は します。 VC --- つの なる」とい 七百才にな なた で作 元気盛 宇宙 な に古 0) 6 Ł 地 れ ならこの ω マ る 球 め て ン W Ø りであ う原理です。 原理 が 0) カ ķ٦ 金星人よ マ を考え、 年 一を教え L ても古 が ント 反対に、 令に換 0 あな るの 同 V 人類 様 気 で を りも 着 数千年 分を起 です。 に新 ま は K 算 7 L 若 或 鮮 V

き想念を保 望ま 想念 なりま に優先 その結果 新鮮な想念がわ 結果 ち続 世 W 権を与え を達成 けるの は 必ず悪しき状態をもたらす なぜなら混ぜ る は容易な れ させるの ことに わ れが望むような結果を得ようとす 合わ です。 ことではあり これと対 せると肉 から 抗 ません 体 内 的 な て K 想念と すっ が 闘 意 初 を

細胞 の始 1/2 め つ の部分で、 て述べ まし 肉体と関係があ た。 九 + パ 2 乜 て ン r 心 及ぶこ から命令 れ以 を

> こと これ カン 胞 ፟ ら来る こそ自分 の です を長生きさせようとする場合に、 やに従わせるように仕向けることは ら命令を受けます。 し 力。 し肉体 Ø 細胞 や 5 できるので ね Ø ばなら す

にも述 益 の習 胞 れをどのように Ø K Ø 集団 ま ため ては 慣に つ 食 団 団は ベ V ま 従 物 な て t 分ける 仕事を う。 の細 O 述 を た細 はだ効果がありま 极 ベ 胞 ま ょ 5 度食物があなたの体内に入ると、心とは 遂行します。 うに、 うべきかを知りません。 ことにします。各グループは他 す。 います。 仕事を続けます。この英知ある働き手を四つの 物を摂取するのに抜目がありません。 いて、 肉体 食物が を 心が は あげ したので、 燃料を必要としますので、 私は次の例を講演などで何度も引 ましょう。 肉体内に入って来るとき、 何が他の事で浮かれ騒 ここで再び引用すること 先ず心 だがこの処理法を心得 と のグループ 関 いでいても 心は \varnothing 別個な 心はそ カュ あ

先ず第一 らば、 出 不快な結果 は 酢中 され を遂行 残 て の る化 のケ あな 礼 た老 5 τ 群が、 規律正し 物質の完全な混和を行ないます。第三の 起こるか 廃物質を捨てます。この過程が自然に行なわれ れるガスを は決して病気を知らないでしょう。 いる細胞 プは発酵作用を起こします。

第二の 心 から いことと、 はみな知っているとおりです。こ の各グループに干渉するならば、 怒気を帯びることによって右の 排除します。 心は安定しない物なのであ 第四すなわち掃 しか ク し心に のこ

てガイドを必要とすることを示しています。

すべ 体の か ことはあ てを蔵 のとお ら解放 維持 構造 計 を果た Ø ŋ と異な され ため して りま すため 肉体は る K 働く りま から るの ん。 無数 です です。 4 K そのとき心はあらゆる差別、 ならば、 ん。 7 の IV ゆえに ま 細 Ì た 胞 プ 如 别 カン 何 肉 人 な 体はそれ K ら成って 分けら 間 る の心 不快 が自我 を支える宇 れ い な結果を て て、 V ま そ 審"。 0 0 宙 わ 細 ح 好き 胞 Ø ŋ て K れ 力 は

て或る は肉 さまざまの程度に 或る一個の肉体または 足指 は 体 は Ø 表現 を完 地 しま 同一の力 の 細胞群 球 世 から自然界 Ø 全な Ñ. 表現体に 胞構造に と指導が は 手の指 現われて 惑星 Ó する 無数 の細 おける宇宙的表現と同様です。 あらゆる細 を他 ٧١ の物質 ため 胞群 る 0) からです。この法則は不変であ K と 物よりもよ 胞 互. は に至るまで同 異 K M 等しく適用さ な 1 協 りま 力し合 け す ٧١ が K ----特別 の力と英知 V ま れてい 無機物 す。 扱 グ V 、ます。 そ しよ 1 ŋ 办5 0 プ

た理由 な 間 る な英知 意 ということです。 つ て と自然との 办。 は 2 Ø Ø 人間 は 自ら 実 カュ が生活 な K は Ø れ 自由意 意志 いとい をゆだねようとはしな ح あ ようと の点に 0 だ の というの もとにある Ø ろ点にあります。 志 方法と目的とを U ます。 唯 あるのです。一つの結果とし 的 な心 の 人間 は、 相 を与えられ カゝ 達 前述 らです。 が は いで、 自由意志的 ″至上なる英知』 自然 0) 人間 ように T 他 は し V٦ は 、ます。 カュ 自 創造主の のもろも る 心 身 自然 を与え Ō K 人間 て 意 カ は ろ Ø 高 志 心 Ø ろに 办 を 0) は 全

> ます。 だ る ね な 可 りま わ る る 能 性を持っ ので です。 とた 世 わ n よ す。 ていて 自己の目的を果たそうと思えばこのことをなさ 金星人や他の惑星人は自己の心を って、このことを日常表現しようと努力してい だからあなたが他人を見るときは、父、を見 1 エスが言ったように「私と父とは 意識の

は(心 閰 とする自らの とえば飲 る習慣にあ 意味では です。ただ てい そしてこれ となって て習 生活 ろこ かる ます は 頓 の 3 れ あ 酒 習慣の が、 りませ しこれ 地球 主 てはま は は、 家の せる 意志 ま は 心は極端に酒 習慣が心の主人となっていて、 K 人 ん。 奴隷として存続しています。このことはあらゆ は数千年続 なる決意を持たねばならぬことを意味します。 間 はあなたが一滴も酒を飲んではならないという ります。 の力と決意とを心は失ってしまったため、それ 無限の力と知識 とによっ は習慣を自分の主人にさせないで、自分が自 (習慣それ自体の)食物に餓えています。た 心に関連した習慣的な細胞群を作っています。 何事でも適度に 習慣のほとんどは極端に作用するから てなされ得るのです。 を飲 V た生活法のため 步 とを持つ意識にその家を(肉体 のは肉体によく やればそれでよい に習慣 習慣に抵抗 ないことを知 K 堕した人 からです。 しよう

さに とた K 気 起 び て 心 こりま 付 自らを が な す。 らば、最初は苦痛と感じても、しょせん意識にその生涯中に多くの不快事をひき起こした自ら ゆだねなけ 過失や不安に出会ったとしても、 すなわち、 れ ばなりません。その 心がたとえ自分のわがままな 自分がわがも の障害 は次

失っ たと K て 6 め う恐 って 办 カュ K 5 持 たない 怖 です。 過失をくり返 の念 たあいだに固持し 自分は から 起こる場合です。 して 心心 は いた当時の乏し てい)さまざまの結果 た自分の正体と権 なぜなら心 V 知 K 識 は と大差 知識 (現象 とを を持 K 0

ばなら 弱点をなく 弱点を認 弱点 こ を は 矯正 と共に苦 は、 な に弱点を付 第 め V ときが るの しよ 自分 すことが母親にできな に困 の子供 を恐れ ろとし 来ま むことになります。 け加えます。 K な た母親 ない母親 は **つ** すが、も 何 てきます。 Ð 悪 Ø はやそ 責任 と同じような つ ₹¥ 專 カン V です。 に母親は つ を 子供 た れ からです。これ て を避 Ø そして は 内部 ф 真実に直面 V けることはできず、 Ď な で目立 です。 矯正する V と 思 しなけ は子 結局 って V どころ が 供 子供 ち Ø た で n

にゆずり エ 自分 とです。 スは 0 を捨て を もあり 言って 渡すこ これは 命 意 らです。 が助 意 る者は、 ます。 な の とに ま W カン け 意 るで たわ りた 永遠 志 10 ょ 永遠の生命を得る 1 ば個 K れ 9 は Ų١ であ エス ゆだねる者は永 ありません わ て起こる恐怖 と願う者は 体は存在 れが神 は り、 次の 万物 よう と呼ん しません 办 そ を ە ح 支えて 遠の生 にも言 を意味 れを だろろ」こ でい れ 失うことに る する 命 っ は M 無 創 エ 意識 る K て Ø あ Ø ⊐* 造主を信じな か います。 意味 で が な個体 5 चें 自 は なる 7 カゝ [身を な す。 は、 るという Ø は 自分 だ 意 C エ ⊐* た

办 の 自己 意志を意 の心 中化 識の 意志と融合させ あると感じ て探 て見付 L 求め አን て る V3 る幸福 Ø です。 は、 ۲ 間

> ます。 れるす カュ 息子 たび ベ 人間 て が 水と には にそ ります の から は 自己 この 家 物 に帰るとき、天には歓喜の声があがるでしょう。れにゆさぶられることもなくなるでしょう。そし 各人の側に絶大な決意と不動の信念とを必要とし rc 。そうなればもはや影の中に生きることも、風 合する水滴が海洋の広大さを知り得る ことに気付くならば始めて自己の真の正体を知 直面 の利己的な自尊心を捨て去り、自分にもたらさ しなけ ħ ばならない からです。 のと

息子は 察力を 家のだ おも自分 れと異な べてを投 聖書中の 方物 を持 な われ れ を描 よく カユ け カュ の る O つ 捨て 放 知っていながら、自分を謙虚にし、自分の自尊心のすが自分を指して自分の悪い行為を思い出させることを たか わ て たも れ 蕩 Ø ķ۶ と の 息 らです。 て、 K ません。 意志を征服 を知っていました。 もとへ帰ろうと決心したのです。 のです。なぜなら帰ろうと決心したあと、 与えます。放蕩息子の心はあらゆる人間の心へ 子の物語は、どうすればよいかについ もたらされるすべての物事に直面 息子は家の者たちの生活態度 これらすべてを知っていながら息子 して、自己の真自我である意識の意志 しかも彼らは息子が経てきた は自分のそ しなければ てよ 彼は はな

へきな の 到着 ため 勝利 た 会を開き、 とき息子の したからです。エゴが自らを指導しようとするほ 生活の必要物すべてがすでに与えられているので 足している物 その努力にたいする報 エゴは あたかも何事もなかったかの はない 驚きました。 のです。 いは無限な というの ように は のです。 父 親 の

です。

そ

てあらゆる生命体

P

個

体

を作

り上げ

る

細胞

Ø

中に

現われて

Į٦.

る

禅

を見るよう

K

自分

ろとする唯 要としま を知 宇宙 5 K ろ その らです。 ŤŢ 的 つの小 蕩息子の内部 τ 0) V 意 中 カュ 行為を思 <u>ー</u>の 5 ^ 部分 それが迷える者に によっ 希望となるのです。そこでそ 化されてい て エ ₹ • ゴたる自我を滅却させるには大い がありま い出させたわけです。 K て克服 し は、 かしこの勝利を ます。 L 悪 され た。それは家 い事をしたのだぞと自らに罪 あらゆる まし とって本来 た。 カュ 個 ち取り、 その意識 し 人には の場所 を出たこと かしこ Ø 本来 本来 なる決 れ 0 へ帰 は 宇宙 審きや差別 生気 はまもな Ø の 9 な Ü が て Ø を 気 い長 行 を必 意 放 識 别 から

まれ は実際 の意志 もは 意味 ح ф — カゝ れ と栄光 な K わることを意味 滴 ķ٦ は 1 0 エ これ ス 水 ぬこ の が で 中化 言 は ح は 2 なく K 前 述 なる します。 ただ生まれか たよろに、 のよ 海洋その カゝ いろに、 らです。 なぜなら、 心 も Ø を わることを望む 海水と同化 新生させ (訳注。 になる水滴と同様です 自我の自尊心 これ する て 個 人 は ときに、 ことによ 肉 が が 新 体 た 宇宙 K 9 間 T:

なた をもたら う必 6 9 ようとも、 謙虚 が如 とい たように 要は さと 何 9 あ P K て、 多く 如何 やらなけれ 意識 りません。 あなたが ません。 の意志 に多く 0) 書物 自我 ただ、 を読 ば、 0) 今の生活 講座や教師 Ø 中化 これ もろとも、 O) 極端 プ ライ らは 生ま で楽 K æ n 何にもな K ۴ L (自尊 如何 つこうとも、 K) カゝ 0 ている わり で K V 多く る物事 りません なさ 心)を死 物事 の宗教 を適度 放 を捨 滅 息 を Z て

掘る

必

要

から

あ

ŋ

ます。

生き方 そして 存在し でに知 を通じてさまざま ω そう ۱Ľ を 仕 あな らな な を くな れ 向 ば、 カュ け りま の な っ め た る 肉 い。 大いなる美と平和に満ちた物事を見るでしょう。 す。これをなし得るとき、あなたの心はこ ことになり、あなたの生活に差別というも なたは金星人や他の惑星人がやっているような の度合に現われている神の生命であるからです。 体は完全さの証 あらゆる生命体の生命や細胞 拠を示すでしょう。 \emptyset 生命は のは 万物

は一 めれ 場を でうまく うです。 以上の を発見すること 初それ ば強め う感情と 情 時不可能 7 をあらゆる ス 不断 すべ ゆ ダ は るほど か 同様 て する に見 不可 な Ø は 努 V にあなたの内部に今あるのです。ゆえにその同 生命体に返せばよいのです。一回や二回の試み 決心を強めればよいのです。あなたが決心を強 は えるの 能事のように見えるでしょうが、あらゆる物 からといってあきらめては 力は成功をもたらします。人間が地表に金 結果はますますよくなってきます。 あなたが めったにありません。真実を探し出すには であって、幼児が歩行を学ぶときでもそ 他 人からどんなふうに扱わ いけません。その立 れ た の鉱 ķ٦

せてそ かりにあなたが大芸術家の才能を持っていて、それに気付 才能というも けです。し します。 の才能 れを達成 ん した か の た カゝ 加 得るということを自分自身に証明することもあ 益を得ることはありません。 水 しあなたはそのことをただ考えたり夢見たりす はそれを応用しな つ って てあなたの才能に関する夢や祈りのすべては それを実現させることができません。 けれ ば何の価値もあ 自分の夢を実現さ りま いてい

ですが て、 するときにこそ、そ ح 、そ て 未知 証 でに述 隠れ れて 明 実を結 た能 であ するでし ~ たす れ り、 力を現わそうと決心するまで続きます。 ばせ は 真実の、 ベ ょう。 の状態の な て 0) V 潜在 限 自己発達 4 り何 り甲 能 ままにあります。 力は の 役 は 斐 あ ح にも立ちませ のあるものだというこ の な よう た 0 内部 なも これ ん Ø K は あ であ あ 決 る な 9

に気 も役立 それ その は なたの日常 づ 力を あなたに役立つ V つでしょう。 てきた物事を実行 再建 生活に しなさい 杉 ばかりでなく、 いて自分 できることがわ そうすれ の能 ばあ 自分の実例 力を現わすことによ なたは かる でし これまで K よって他 ょう。 に意 すると 9 人に 識 て 的 •

ん

て自分 るので 実例 裁者が人民を支配しようとする れることもあるというの 人に を示 れまでさまざまの実例 あ に反抗する者を殺します。 を実行することによ 用 って、 せないことはありません。 しな IE して正直で誠実であり得る前に、 て け く 単なる言葉や夢で示 で誠実であらね te ば な る りません ことを期 VC. 9 が示され われ て とき、 待 のみなされ ばなりません。 ح わ しようと思えば、自己 せる われ れ ん てきま が世 な 他 わ 野 K 0 間 では れ 蛮 る た 自己の た。 はそれ な K のです。 V 方 他の た す ありません。 法で W る た を行為 意識 と してす 4 "良き自我 われ 4 え 実 例 的実体 ば 0 ぐれ わ で示 が示 めとし れ ح ħ 世 が た 75 は

た あります。 真実の生き方を知らない多数 い生き方をするには、 なぜなら人間というも 不動 0) 信念と忍耐力とを持 0) 0) 人々 はそ のあ W な考え方をただち いだ K あ つ必 っ て、

> とし K とするの りません。 するからです。 W て 把握 はなりません。 れわ ても堅固に立つことができ、吹き飛ばされることはありませ しようとは なら、 れは岩盤の またあら しか 強く ゆる分野の先駆者は、よき結果をもたらそう なり、 そうすれば自分の生活に雑多な抵抗が嵐を起 上に基礎を築くべきで、崩れやすい砂上に築 ません 生存し続けようと思えば変化しなけ 断固たる決意を持たねばなりません。 し、一般人はきわめてゆっくりと変化 ればな

得ませ る方法 極力避 よう も 局 す 0 立 結果 され です。 ける 全体 ア から きで ない 惑星 こすトラプル W ために、これが利力 それはあくまでも個人的なものであって、 氏の見解は何 いうのは真実でしょう。 る の人間から伝えられたということにな な いことは明確です。 書に掲載 大方 求 のすべては無知に起因する恐怖 道 の批判にたいして掲載されるほどの ごとは らかの参考になると思 され 日 個人的なものだ わ ゆえに大衆催眠術を 問題は恐怖 て如 の科学的な理論 しょ 何ともなし と言える を除去す います。 って

品です。この方面に趣味をお持ちの方はご連絡下さい。(久)てきました。好きな曲はソル、タルレガ、ヴィラロボスなどの作◎私は音楽を愛好し、へたながらも多年クラシックギターをやっ

1編集後記1

3 ッ ク V テ 月 そ です は ア 0 歺 記 事 ス をふ 丰 1 Þ 行 し $V\subset$ ま \emptyset V た。 コ

心とはア うふうにゴシックで表わしてあります類していますので、"生命の科学"講のアダムスキーは人間のフェー と同時に けた際 したも 年四月 る自 **警**物 て視 強 です。 5 デ 我 祝覚、聴覚、見む、 ア氏の言う、センスマイン にコシックで表わしてあい 打 わ かの ン の心 0 死 ても で で、未ず デンマ ら数ヵ月間 マ 滅すべき性 が て意識を失った」と は であ 今号から なお人体 ŋ 般 G A 発表 り、 1クの大会 と題する書籍 に表 る 、 ・)斗学、講座ではそれを心い間の不可視の構成要素を心と意識をの情報を多数4m/ 0 アダ 一質のも 肉体 を生か 現 は してあります。 0) 困 とも の味心覚 ムスキー 難 て で行 ン のです。一方、 心ともいうべきもので、 し V٦ であ ンド』のことであって、ります。すでにご承知の ス 0) かっ 続 る いうべきものな 冊 次 四つの感覚器官によ -0 ける普遍 わが がペ 無意識 て 意識 送られ れ 彐 た質 1 ル 実感 口 也 的な に柱 とは異なって、 疑 ッ てきま 意識と ン 応答 パ たし "英知 K でし を連 なはだ を主と 識 心と いうの が た。 演 み 肉体 っ の二つと あ ょう す これは、 て形成 意識 載 つ ベ いは、筋の筋 興 失神状 \exists ます。 ځ た、崩壊 て い分 深 主ち

な治病 0 心まな われます。々なわせり 例 各種 本人 意 のに が 宗教団 融 Ž る 体 世 で発生 る 奇 意 する 跡 K 跡 U る 0

> 考える 思問いて けます の 力× ン 態度を自己観察なるべきか」と ζ. 1 わ F 7 ずが、数千の ます。「 ち独善と恐怖 1 酔 りま が て 言うよ 的 团 数千の る ぅ す。 な っ って 自分 」って といは 同 7 大 察 ろ たちの宗教を信じなければ教 できないほどに盲目になっていいう問題を考える力を失って、 できないほどに盲目になっているが に満れまざるを得ません。信力 においまざるを得ません。信力 ろ て た ح 成 の大外 を 一 発 種 なた り 存ピの在ラ何 種 が りま 教生の時 とも り 肉 ノミッドであるとの物でもないと思えった熱狂的な を信じる。 ア氏は 7 来まれ ん氏 の すが を結 ŧ で B ح し 7 はいと思われます。 はいと思われます。 は、なっている例を がありません。信者自身が て ているという説が流れたこ を失って、芝居じみた自分 になっている例をよく見か になっている例をよく見か になっている例をよく見か のな雰囲気は、センスマイ のなまかれます。それはす がと思われます。それはす 果的宗 ま が否定して は教われた。 は教はクリ ではないには応じ ではない。 ではない。 ではない。 ではない。 強が否定 そが ら注意を要すると 教自 か体者 いな 用 ij る論 5 シ がの K て、 文中でそ \varnothing は ナ Ø を強 肉体 霊魂 信者

	•				•	•				•
	Ŏ 円	(七()	年分送料共七〇〇円		公一カ	A		ļ	通	
· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		料二〇円	円·送	価一〇〇8	頒価一	g-uph	刊発	十月十日	等第	
	八名儀)	恒人夕	八郎個	保 格 田	(_久 振		九	=	24号	
	益田古川		\blacksquare	限具益	島					
	P	A	G	本	日	所	行	発		
	郎	八	田	保	久	行人	編集発行-	翻訳		
	<i>10</i> 月 号	10	<i>9</i> 月	964	1	レター	ーズレタ	A P = 1	本 G	日
_										